299

259-191

259-191

東都遊學校評判記

明治
42 3 24
内交

259-191

教育界之三恩人

伯信重隈大人偉之境逆

明治教育界の巨頭福澤諭吉翁

後進を扶けし矢野次郎翁

學界の大王國引卒者（其一）

カッポレも知らざる濱尾總長

學界の大王國引卒者（其二）

個人主義的の坪井文科學長

駒場の主權者松井農科學長

内科のオーソリテー青山醫科學長

帝王神權說の穗積法科學長

私立三大學の首腦

人使ひの妙を得たる高田學長
—早稻田大學—

獨立自尊學風の繼承者鎌田塾
—慶應義塾—

時代之傑物

現代の大立物新渡戸校長

—第一高等學校—

柔道宗開山加納校長—高師—

忠實なる手島校長—高工—

私學之三重鎭

現代之碩學博士田尻校長　—專修學校—

勞力主義之月水理事　—日本大學—

商業教授に秀でし梅校長　—法政大學—

當代の三學者

—商高—　長岐崎松ろれなと心中の題問下四

一世の雄たる氣に缺ざる岸本校長　—明大—

神田五大學の一大勢力菊地校長　—中央—

水陸の三校長

大和魂の擁護者南部校長

—陸軍士官學校—

東鄕大將の右の腕島村校長 — 海軍兵學校 —

溫厚篤實の君子松原校長 — 水產講習所 —

序

笈を負ふて遊學すと、昔時の人は言ひけん、百里の山河を草鞋穿きで江戸へ出た時代の書生は、同輩の少ない爲に競爭も容易く、或は之を遊びとも言ひ得たらんか、而かも當時田舍から出懸る道中の艱難辛苦は、旅は憂いものと相場は定まり、可愛い子には旅といふにて、其の大概は推せられぬ。今は其れとは全然反對に、千里の遠きも鐵道あり、汽車中に寢ながら上京するを得れば、年々歲々修學の爲に集まる東京の學生は、幾萬といふ數を知らず。彼等の上京は、爾かく容易なるも、其の修學成業の困難は、また前日の比にあらず。螢雪を燈

に代へ、股に錐さして睡眠を忍ぶは何の物かは、徹夜の試驗準備に、神經衰弱を起し、入學試驗の席上では、卒倒する者さへ少なからず。正に是れ一命を賭しての苦學は、戰場に於る軍人の奮鬪と異なること無し。

彼等數萬の學生を收容するに、官私立の各大學、高等普通の男女各學校、巍々乎たる大建築は東西南北に相對し、日々其の門を出入する制帽や海老茶袴の夥多き、正に昭代文運の隆盛を飾るに足る。而かも其等の各學校には、鶴の脛の長所、鴨の脚の短所、假令局外から見て是非得失の批評ありとも、各其校の特色として、柳の線りに花の紅なるいろ〳〵樣々を、細かに觀察して精密に批評し、未だ學校に入らざる人々の爲には、入門の手引とし、既に修學中の人々には、他山の石として、趣味も實益も兼ね備へたるは、此の東都遊學學校評判記なり。

著者潮風河岡氏、靑年の健筆家にして、老熟の批評眼を具し、觀察の奇警なる上に、各學校の特色を描寫して、字々生動の妙あり。讀み去て余もまた覺へず往日の書生時代に若返り、敢て評判記の評判を試みける。

己酉二月中浣

坪谷水哉

むかしの恐い小父さんは、人の陰口を嚴しく戒め、品評を甚だ嫌つたものだ。

然るに今はそんな遠慮は流行らぬ、棺を蓋うて定まると云ふ、現代の人物をさへ、生きながら月旦する世の中である。而してその月旦によつて、また神益を得る世の中である。

河岡潮風君は、現に僕と机を並べる同僚であるが、近き過去までは學生々々活をして、その酸いも甘いも咬みわけた人だ。今その人に依て、此書が出來た。思ふにその月旦は、何人をも首肯さすべきものであらう。と同時に、一は學校自身を猛

省せしめ、一は學生社會を警醒して、現代文教に裨益する事、決して少からぬであらう。果して然らば本書の効能は、他の學校の趣意書、廣告文に比して、遙に有力であるに相違無い。これ學校の學生に代つて、僕の感謝しやうと思ふ所だ。著者果して首肯するや否や?

明治四十二年二月

巖谷小波

學校評判記に序す

河岡潮風君の學校評判記出づ、奇警の着眼、雄健の文筆、近來の快著にして、本書の出づるは、學界の爲に大いに歡ぶ處也。

由來潮風君は、筆を劍と信ずるの士なり、蠢々たる軟骨文士の徒に非ず、君をして武人たらしめは、腰間の秋水、一たび鞘を脫す、必ず人を斬らずんは止まざらん、君をして劍客たらしめは、皆傳免許の腕前位では滿足せず、或は諸國武者修行に出で、或は鞍馬山に天狗を尋ね、必ず劍道の極意に達し、別に一新機軸を出さずんは止まざらん、太平の世、幸か不幸

か、君は武人剣客たらずして、柔弱輩の多き文界の人となれるも、君が筆を握るの氣慨は、剛勇の武人が剣を拔くの氣慨に異らず、此故に君は文界の人たるも、パンの爲に筆を曲げ、酒色の爲に文を舞はすの軟骨文士に非ず、一たび一管の筆を取つて紙面に臨めば、必ず何等かの主張を貫き、何等かの一新機軸を出さんと苦心す、其意氣や壯、その抱負や快、文亦壯快ならざるを得ず。

余は本書の提燈持にあらざるも、序文は一種の口上なるが故に一言す、本書は世にありふれたる遊學案内の類に非ず、學校便覽の班に非ず、彼の徒らに諸學校の規則を竊み來り、講師等の名と共に陳列せる駄書と同視する人あらば、本書の著者は泣かん、本書は此種の著書中、前人未發の一新機軸を出せる快著也、或る主張を以て作られたる好著也、筆に活力あり、文に生命あり、學校外觀の紹介にあらずして、其本體の遠慮なき解剖也。

潮風君の筆は名騎士の駿馬に鞭打つて驅けるに似たり、都下數十の學校、到る所に驀進し、縦論横議、或は其校風を批評し、或は其講師を品隲し、是を是とし、否を否とし、強敵に驚いて手綱を引緊めるが如き醜態を見ず。

潮風君の筆は探偵に似たり、何時の間に何處から忍込みし

とも知れず、校内の秘密も寄宿舎の内事も盡く嗅付け、果ては賄所の鍋の中まで覗込む。

更に潮風君の筆は禪僧に似たり、單に學校世界にある人の福利を祈り。其進むべき方向を照し示すに止まらず、其學校生活を終りし場合は、如何にして活動の別世界に浮び出づべきや、即ち所謂立身出世の最も便宜なる引導迄も渡さんとするに似たり、果して其引導により、學校生活を終りし萬人、盡く立身出世の光明界に浮び得るや否やは、保證の限りに非ずと雖も、この引導あるは、俗僧の念佛よりは確かに其功德大ならん、兎にも角にも本書は近來の快著也、世界此種の著書中、最も有益に、最も愉快に讀み得る著書たる事を確信す。

三月上旬

冒險世界編輯部にて

押川春浪識

自序

學校を撰むと云ふ事は、聟えらみ、嫁えらみする樣である。下手な奴に引つかゝつたら最後、生涯の大損で、ウダツのあがりつこはない！　學校だつて、自分の性格に適せぬ處へ首を突き込んだら、モウ駄目だ。伸ぶべき才も伸びず、發展すべき將來も、收縮して仕舞ふ。げに、心した上にも心すべきは學校の撰擇ではあるまいか。

然るに飜へつて世間を見わたすに、入學試驗の秘訣を教へる書物はある。また問題集や、規則集はある。シカシ、縱橫に學校を評論して、中學卒業生や、乃至年頃の（高等教育を受け

るべき）兒女を有せる親達のためにしたる單行本はない樣子――是れ大袈裟に云へば、明治教育界の一缺陷である！

著者は眇たる一書生である。けれどもそのお蔭には、各學校へ出入する機會多く、各校生に數多の學友を有せる事は、妻子のある年長の人々よりは多い譯だ。從つて、腕力や學力で敗けても、學生界の消息通に於ては敢へて、見苦しい敗北はとらぬと自信して博文館の諸雜誌に載せたる各學校の評判記が、塵積つて山となり、今この小册子とは相成つたのである。

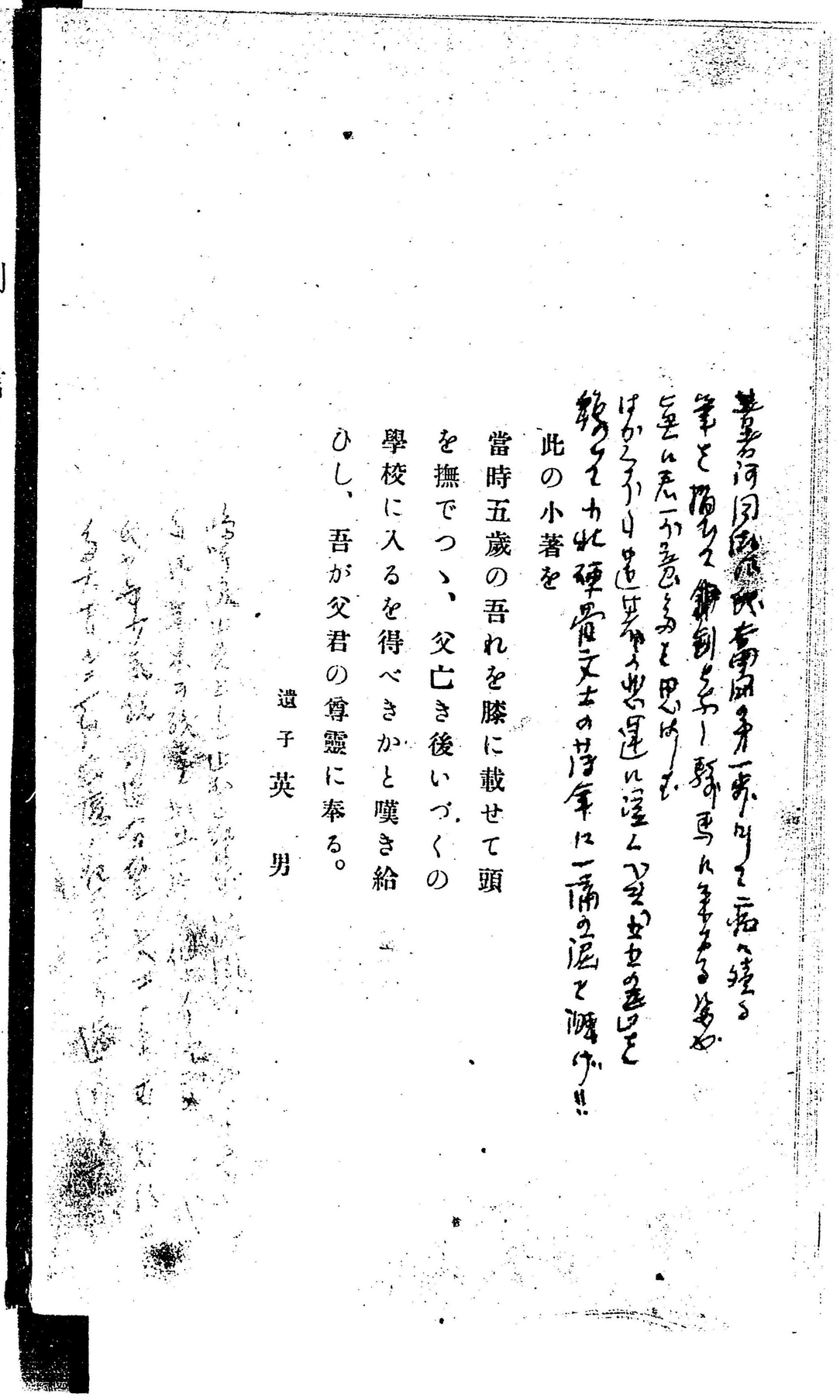
出來上つて見れば意に滿たぬ個所もあるが、自分の子なら不氣量でも嬉しいと同じ道理で、多少拙くとも內心頗る恐悅にたへぬ譯――シカモ坪谷、巖谷、押川三先生より過分の贊辭を辱うしたるに於ておやだ。

吾輩は社會の批評の善惡などは關はぬが、もし幸ひにして此書、未來の方針に迷へる學生、父兄諸氏の手にわたり、幾分の御參考にでもなれば、著者の本懷これに過ぎず、わが著は無意義の反古製造でなかつたと安心する次第である。

先は世間の例に倣ふて、序文に由緒を明かにする右の如し。

明治天皇第四十二年二月十六日、立志鄕關を出でし四週年紀念日。

博文館の三階にて　河岡潮風



此の小著を
當時五歳の吾れを膝に載せて頭
を撫でつゝ、父亡き後いづくの
學校に入るを得べきかと嘆き給
ひし、吾が父君の尊靈に奉る。

遺子　英　男

例　言

▲本書の一部はかつて博文館の冒險世界、中學世界、女學世界などに載せたものである。訂正增補して轉載の許諾を賜はつた好意を以上三雜誌主宰者に改めて御禮申上げておく。

▲もと趣味と實益と二つながら兼備せしめんとの野心で筆を執つたから、時によつては吾ながら書きたらぬ點も多い。けれども全冊を通覽して下されば、余が云はんとする所は悉く盡してゐると信ずる。

▲夫れでも不審の點があつたなら、御遠慮はない、どし〳〵問ひ合せ下さい。但し郵稅不足だの、先拂ひだのは困るから、必ず返信料だけは同封しておいてもらひたい。

▲是には質問券をつけやうかとも思つたが、頗る手數がかゝるにより、本書奥附を引きやぶつて入れてきた人には、大抵な面倒を見やうと云ふ事になつた

例言

どうか是も御含みを。

▲完全なる學校評判記は今後ゼヒなければならぬものと思ふから、僕も見て、女學校のも一冊にする心算だ。現に毎月女學世界に少しづゝ書いてゐる。特志の方は御覽願ひたい。

▲なほ本書について所感のあらせらるゝ諸君から續々御批評を賜はる事を得ば難有く存じます。以上。

三月六日

馬鹿に陰氣な日本町にて

著者

東都遊學 學校評判記目次

東京帝國大學……一

私立さらひの澤柳前文部次官——五分科の長所と短所——ハイカラ不養生のお醫者さま——証記萬能の法科大學——法學士と商學士の競爭——文科大學の外國文學排斥——理科大學は金にならぬ——工科大學の賣れ口と月給如何——ヘコタレずに働け働け——中學生は豫めこの覺悟を要す——昔の大學生の無邪氣なりしを見よ——蓑包みと腥坊主——痛快なるラア物語——今の大學生は角帽中毒なり

駒場農科大學……三四

珍妙なラツパぶし——假すまひ的寄宿舍——田舍武士にさも似たり——汗涙ともに流るゝ實習の苦しみ——同志爭ひは見にくいぞ——ドシ〳〵世界に雄飛せよ

第一高等學校……四四

車掌然たる破帽書生——一ケ月十二圓の學資金——藤村操と幽靈部屋——ホールがなければ夜があけぬ——欣すべき籠城主義——ストーム、寮雨、萬年床——ハイカル博士と德富蘆花氏——ステツキの雨——下駄の齒は大閉口——變化しつゝある思潮——十

目　次

年後が樂しみだ

早稻田大學……二

昔は豪傑の亂暴くらべ――今はハイカラ黨あり――壁カラ黨あり――隱居黨あり――伯と三博士――壯快講師――早稻田八景とは何々ぞ――賭泣せの寒稽古――寄宿舍の珍世界の如き人は本校に入學すべし――學校當局者への苦言

慶應義塾大學……九八

想理的平民福澤諭吉翁――實業界へ如何に人材を供給せしか――かけがへのなき重役――銀行多くして船、山へ昇る――花の蕾の幼稚舍々生――ハイカラなのは普通部――大部は理財科萬能――食道樂も官學に拮抗す――商略の成功――家族的などゝは青年の言にあらず――何でもかまはぬ野獸の如く運動せよ――秘密結社の鐵拳制裁は贊成だ

神田五大法律學校……一二五

玉石混合の學校屋町――先づ私學校の短所を申んか――卑怯、無氣力、ポン引的――廣告のイカサマ手段――明治大學は七轉び八起き――猫の屁の法律的解釋――商略なき中央大學――日本大學は月水の學校也――法政大學下宿舍――知事樣も生徒――溫厚なる專修氣質――これも北雷博士の感化――何んと云つても五大學の前途遠し

東京高等商業學校……一三九

世話すきの矢野校長――學課よりも體格試驗は馬鹿にやさしい――ネーム、ブローカニング――外國語は十八番――電燈教授の怪氣焰――融通のキク今樣學生――中に禪園あり――紅葉館で會費十圓――商學生の泣言――シカシ將來は有望ぢや

東京高等工業學校……一四九

角帽こそ被らめが――實力では負けぬ――印度人あり邏羅人あり――紳士的の職工と――ライスカレー丼――驕派心が強い――園子レースに雜巾角力――內職のたのしみの下で風流立ン棒――暑中休暇の日給とり

東京外國語學校……一六一

文部省の繼子扱ひ――入學試驗について――住めば都のバラック校舍――佛語科のん――現校長の不評判――卒業生立身の現狀――八ヶ國の言葉でお芝居

東京高等師範學校……一七一

俗に碎きし文科大學――食ひしんぼうな陶淵明――果實のぬすみ食ひ――コスモスの安値主義の寄宿舍――目遣婆さんが綻をぬふ――卒業後の困却――文部省も胴慾

水産講習所……二[illegible]

廿世紀の漁夫には教育が必要だ――スパルタ式の寄宿舎――最低十五貫目――嚴冬にシ[illegible]
旅行でもやる――館山沖の鯨狩り――朝鮮沖の難破――帝國軍艦の救助――卒業生の職業典

東京商船學校……二三一

煤煙の龍、日の丸の旗――高等海員養成所――學校即ち寄宿舎――暗い廊下でピアノが響く
――ドンなんか當てになりませぬ――十里を望む高塔の夕まぐれ――拂曉の寒さと、甲板掃除
――呑氣なるリン〳〵ぶし――船長の子に船長なきは如何

陸軍士官學校と中央幼年學校……二四六

威勢のよき軍人――角帽と短劍と相ならむで青年の羨望の中心――一分も油斷がならぬ――四
角四面な起居動作――體格よき清國留學生――日曜下宿が天國だ
桂太郎さんの母校――喇叭によつて進退す――上下の差別がはげしい――豫科生の活潑――オ
ハチの陷落――大和魂の根源は此兩校にあり

東京女子高等師範學校……二六三

ニコライの尖頭を望むだ古い校舍――官費生と私費生――弓を射て腕力の養成――女豪傑井口
あくり――お阿父さんはヨカ〳〵飴屋――ユープツ多き高等女學部――豚の刺身とドラヤキの
御馳走――わかれ〳〵の身の成行――お仕舞は大抵奥樣

日本女子大學校……二八九

眼つけどころが凡人と違つた成瀬校長――亭主の寄生蟲は作らぬ――前代未聞の小さい椅子
――豪商森村翁の寄附――自然啓發主義――浪さん武雄は居ますよ――櫻楓會の詩的事業――
體育運動が盛んだ――若い男は門前拂ひ――女子兵役論愛讀者――御馳走くらべ――寮舍生活
と輕井澤の夏――コレでも家政科卒業か

附錄

⊙海軍兵學校生活……一
⊙冒險世界事件の反響……一
⊙諸學校入學受驗秘訣……一
⊙新渡戸校長に對する誤解……一
⊙松崎校長排斥せらる……一

目次

目次終

東都遊學學校評判記

河岡潮風著

東京帝國大學

私立ぎらひの澤柳前文部次官――五分科の長所と短所――ハイカラ不養生のお醫者さま――筆記萬能の法科大學――法學士と商學士の競爭――文科大學の外國文學排斥――理科大學は金にならぬ――工科大學の賣れ口と月給如何――ヘコタレずに働け働け――中學生は豫めこの覺悟を要す――昔の大學生の無邪氣なりしを見よ――糞包みと腥坊主――痛快なるラブ物語――今の大學生は角帽中毒なり

△澤柳文部次官の失言▽

かつて腸窒扶斯に犯されてより、氣焔も擧らぬ勝なる、前文部次官、澤柳政太郎氏は私立學校嫌ひである。その專門學務局長か何かの時代に『余をして

部大臣たらしめなば、私立大學を片ッ端より撲滅す可し』と演說し、神田五大法律學校の血氣の面々、青筋立てゝ談判に行つたことがあつた。又た昨年某私立大學の創立何十年式やらの時には、君の學校は感心は感心だがまだ大學の赤子だよ。ヒヨッ兒だよと罵倒したとやら。根が文學士ゆゑ、母校に忠なるは嘉すべきもあまりな過言と、ゴマメ然たる齒ぎしりをした男もあつたと云ふ。けれども、かゝる人々にしても、足一たび帝國大學の表通りを過ぎるならば、口惜いながらも澤柳次官の言の正しきを悟るであらう。見よ堂々たる赤門の嚴たるを、木の間を洩れて、煉瓦作りの洋館、軒をならべて連らなれるを、出入する學生、勿論、中には、バック的の間抜面もあれど、大抵は分別あるらしき秀才顏。これを滔々たる私立大學が假普請的バラックにして、面積狹少、學生は國民軍然たる烏合の衆なるに比すれば、如何に扼腕して、その負け氣味は爭はずして認めざるを得ぬではないか。こゝに至つてか財政學で、『大學教育の設備は多大の費用を要するものなるが故に、國家自ら其の衝に當るを最も良しとす』と習つたのを今更の樣に思ひ出し、ボンヤリと指を銜へてイむ私立大學生もある。然しながら一體全體、大學はそんなにエライものなりや否や。

△五分科の長所短所▽

大學と云つても、理科もあり、工科、文科、醫科、法科と色さまざまの旗の數、年限も三年より四年半迄、學風も從つて違ふ。何科の學長は誰で、講座は何々であるなど云ふことは、六十錢奮發をして大學一覽を丸善から買へば解るから、篤志家は、夫れを御覽なさい。シカシ一覽には各科の特徴は載つて居らぬ。

醫科大學

△一名ハイカラ不養生大學▽

東京帝國大學

〽菱形の帽子に金ボタンの制服つけて、襟にMの字ひからかし、ノート片手に
　子、大學へ通ふ姿の程のよさ——
とは赤門醫科のハイカラ連が、どつかの小料理屋の二階に、安洋食でも鰭腹
ムシヤついて、ビールの五七本も倒した跡で歌ふおきまりのサノサ節である。
立志郷關を出で〻數年。いつ習ふとはなく都の手ぶり、物云ひぶりに染まつて、
なけなしの財布はたいて散財する書生多き中の、隨一と呼ばれてゐるのは彼等
醫學生である。
　醫科大學は無緣坂口の鐵門をくゞれば聳ゆる時計臺下の大學病院より、西、
赤門に至る廣大なる面積を占め、四萬坪に近いと稱せられる。すでに千二百餘
人の學士を出だし、七百十四人の學生を有す。卒業後は病院醫員、開業醫、學
校職員等になるのが多いさうな。教授は刀圭社界の精英を抜いて集めた人々で
あるが、いづれも學生の機嫌を取るやうに、お手やはらかに教へるから、左程
苦しいことはない。從つて遊ぶ。身のまはりを飾る。大學白粉や、赤門おしろ
いや、リボンを買ふは此の科に多し。尤も彼らに云はすれば、理窟もあるので、
かつて一高卒業生謝恩會に谷山舍監が『大學生になつた後も一高の儘にありた
きもの。チヅクや香水で身を固めるとは、咄、何事——』と云ふ意味の演說を
すると、第一に反對したのは醫學生で、『吾々は蠻カラに過ぎては卒業後、お役
が務まりませぬ故、忍むで學生時代から練習するのであります！』と答へた由。
シカシ實地研究に念が入り過ぎて、身を持ち崩すもありとかや。かの『ヘルツ
に惚れるが眞のリベ〳〵』の如き獨逸語入りの俗歌は醫科の創作であるに徴し
ても、如何に通人多きかを知るに足らむ。げに昔も今も困るのは醫者の不養
生。これぱかりは如何にお手前もの〻藥でも癒らぬとみへるテ。
　とは云へ、同じくMの字を光らかしてゐながら、變色した制帽に、あいた制服で、平氣な學生もゐる。どうせ卒業すれば、五分科の〻

口がよいのだから、ハイカラになるも當然であらうが、學生の間は、寧ろ此方が奥ゆかしいではなからうか。

本學の學長は内科のオーソリチーと呼る、青山博士である。敎授には多士濟濟、一々擧げるに遑なき程だ。科は醫科と藥學科の二つに別たれ、前者は四年、後者は三年也。

卒業後、金になるは勿論醫科だが、頗るキタなきも醫科だ。外科へ群血淋漓たる負傷者の來るなどは何でもないけれど、臭い腫物などのヒヨットコ面の、踹跚に來られては閉口せざるを得ぬ。内科ならば、肺病患者であらうが、傳染病であらうが、その脈をとらなきやならぬ。巢鴨あたりの氣違ひ病院へ行つて、蘆原將軍の氣燄を拜聽したり、色情狂の婦人に首ッ玉へシガみつかれて、

「可愛い男をどうして呉れる？」

なんかと、物すごい聲で怨せられた時などには、初學年の間はツク〳〵いやになるが、習ふよりも命せらるゝよりも、慣れつこは恐ろしいもので、お仕舞には、附屬大學病院もわが家の樣に心得、闥髏に菓子を入れて持ちあるいたり、解剖室の、半腐りの屍をイヂくつて手も洗はぬ程に進歩するのだ。

法科大學

△筆記萬能大學▽

醫科を藪井竹庵製造所、一名通人大學と惡口つけば法科は病人收容所、筆記萬能大學と呼ばずばなるまい。勿論これは誇大の言であるが、何にせよ、法科生が高等學校時代に比して、著しく元氣の衰へるのは事實である。どこの高等學校でも、最も活動する科は法科にきまつてる。ソレが進むで大學となると始めは先づ筆記で忙殺される、偏狹なる敎授先生連の口述した通りの答案を出さねば、進級の出來ぬものと知れる學生は、全力を傾倒して、生きたるタイプ

ライターを以て甘じ、ノートの製造に憂き身を窶すのである。某博士が、講義中に『其状、あだかも眞綿で首を締むるに似たり』と言ふと、これを聞き洩した一生隅より大聲で、『先生、何で締めるんですか？』と叫むだ。教授笑つて、『一例に擧げたのだから、何で締めても差し支へない。』と答ふれば、『デは試驗にも、何にて締むるも可なり。と書くのですか。』と反問したなどの逸話も殘つてる。一句の末迄聞き落すまじとせる狀、概ねかくの如し。

右樣の次第なれば、一學年の末には、筆記机上に堆たかく、大精力を持てせざれば、追つゝかぬ。他科の樣に、間に合せの試驗勉強では駄目だとて、六月の準備を、節分の頃から始めるのである。是れとりもなほさず、譜記の競爭に非ずして、體力の競爭である。シカモ問題は、單に二三の筆記試驗で決するのだもの。大いに危ツかしい譯さ。これ血を吐いて青くなりながら、ノートと首引する所以である。あゝ法科の制度は禍なる哉。法學士となる、亦た難い哉——

然れども同大學生は云ふてゐる『法科の制度は苦しいに相違ないが、私立學校の法科に比して多大の特典と信用とを有するから、卒業後は樂である！』と、成程御説御尤もの次第だ。

本學の學長は、穗積博士（八束）で、教授に梅謙二郎（法政大學校長、近者同校を質に入れて、一千五百金を借りたと傳へらる）金井延（シヤレの名人也。和田垣博士すら、お前のシヤレにはカナイエンと云へり）宮崎道三郎（法制史擔任、三重縣人。士族か平民か、吾れ是を知らず）穗積陳重（學生の面倒を見てやるので名あり。壯時某家の養子に行き、放り出された人。その博士となるに及んで、養家一同、あんなチンチヨウな人と知つたら、離緣せなんだものをと悔む）土方寧（麹町三番町に宅あり）戸水寛人（神田五大學の部、日本大學中に詳細の記事あり。參照せられよ）寺尾亨（日露戰爭時代、七博士の一人）岡野敬二郎（商法第一講座擔任）松崎藏之助（東京高商校長を兼ぬ。妻君は美

人なりとぞ）岡田朝太郎（清國政府に聘せられ、北京學堂に教官たり。年俸二萬圓、歸朝迄には嘸かしシコ溜めらるゝ事なるべし、モト現友社の一員たりし事あり『夜ふけてかへる我家には、寢入る坊やと待つ女房、どちら向いても氣がとがめ、獨り心で詫をする』と、ドヾイツを作つた風流な教授）松波仁一郎（商法のオーソリチー）山田三郎（早稻田出身、肺病との噂あり）小野塚喜平次（政治學を教ふ）美濃部達吉（藤村操の引き合ひに出る人。諸君ナゼか知れりや）河津暹（一昨年神田乃武男爵の娘を娶れり。順境をトン〳〵拍子に昇つた學者、あやかりたくば、氏の肖像を枕の下に引いて寢よ）高野岩三郎（中々講義に趣味あり。統計家。著者は此の人の筆記だけ倦きなんだ）山崎覺次郎（その講義錄は價高し）……等の諸法學博士は特別有名也。尚ほ加藤、志田、筧、中川、立、川名、矢作の七博士も特別有名の部に入るべき方々なるも、紙數の都合で略す。惡しからず、諒せられよ。

△新らしき傾向▽

兩三年前までは、法科生は卒業後、大抵は官吏を志望したものなれども、金力即權力の世となつては、貧乏政府風を吹かしたとて、左程幅もキカぬと見切りをつけて、實業界へ入るもの年一年と增加してきた。つまり法學士が商學士と競爭しやうと云ふのであつて、奇妙なる現象である。會社によつては、破格の拔擢を受け、好地位に坐し得た法學士殿もある。學校でも形勢を見て取り、從來、法科（獨逸法科、英吉利法科、佛蘭西法科を含む）政治科の一つたものを、昨年度より更に經濟科なるものを增設した。創設日淺クは解らぬが、成績がよさゝうだとの事。將來が見ものだと思ふ。

文科大學

△外國文學排斥▽

東京帝國大學

『在來の文學士には知名の人が多いが、コレからはあんなに出まいよ』

風生の識る文科大學生の述懐であつた。成程一覽を繰つて見ると、十三月に和田垣謙三氏を筆頭に七八人產出した時より、十四年には末岡精一、坪九馬三、都筑馨六、辰巳小次郎、嘉納治五郎、田中稻城の六人の名士を作り。十五年には、有賀長雄、高田早苗、山田一郎、天野爲之の四氏を數へ、降つて二十九年三十年頃までは、多くの名士を輩出せしめたのは確かに日本一と云つてもよからう。

處が近年になると、敎授先生同志が、各自自己の權力を擴大する事や、子分を作る事のみ考へて、氣に入らぬ奴は、たとへ秀才でも洋行させぬなどゝ、偏狹な御意あそばす。是れでは俊秀の士も勇氣が、くぢけざるを得ぬ。從つて昔ほどの名士も出せまい。

それから、モット詮議すれば、感心出來兼る事柄が多々ある。諸君御承知の通り、本學には、史學科、文學科、哲學科の三つがあつて、哲學を九科に、文學を三科に、文學を七科に別つてるが、その內で、英文學科や、獨文學科は出身者に博士號を與へぬなんかと、テコヘンな內規？があるものだから、どうも行末の見込みがない。有力敎授の說によれば、外國の文學なんか眞の味が日本人にわかるものでない。果して然らば學位もやれぬと云ふにあるさうだ。從つて敎授の待遇もよろしからず、高材逸足の士は、片ツ端より他へ去つて仕舞ふ。されば、目下の處では、英文學の研究を熱望する篤學者は寧ろ早稻田の文科か何かへ行つた方がよい位だ（尤も卒業後敎師として世に立たうと願ふなら、矢張便宜多き官立へ奔るの得策なるは言を俟たぬ）

本學の學長は、坪井九馬三博士だ。敎授には星、元良、井上、上田、三上、高楠、大塚、萩野、建部、服部、箕作、芳賀、姉崎、白鳥、田中、市村等の諸文學博士がゐる。

東京帝國大學

何にせよ。創作家、操觚者、外國文學者志望のものは文科大學は向かぬと思はれるのである！

理科大學

△金にならない學問▽

一體學者といふものは、世事にウトイのがお定りだが、生存競爭の劇烈な今日では、大抵は食はんが爲め、着んが爲めに、幾分か本領を沒却して、營々と働いてゐる。赤門五大學も日に月に此の渦中に卷き込まれつゝあるに際し、こゝに殘壘を保つて、純學者の爲めに氣焰を吐いてるのは理科大學に及ぶなからむ。此の學問元來が最も超世間で、必要なものに相違なきも、サテ算盤玉に合はない事夥しく、早稻田や慶應等の私立學校で設けて見たが、スグに潰れて仕舞つた位。どうしても國家の力に待たねばならぬ。かゝる理由よりして著者は理科に於ての本大學は、本邦唯一無二の研究所なりと斷言する。

天文學者の爲めには不完全ながらも麻布に附屬天文臺あり。植物生は小石川の附屬植物園（四萬餘坪）及び日光分園（同地方はわが國の植物殆んどすべての類を網羅するを以て鳴る）に實地視察が出來るし、動物生は相州三崎の臨海實驗場に赴くべし。何しろ明治十年より今日迄三十餘年で理學士を出すとタッタ五百二十三人（法學士の如きは二千六百人に及ぶ）現在學生數百七十三人（法科の如き二千百二十四人也）で、科を八ツ別つて、數學、星學、物理學、化學、植物學、動物學、地質學、鑛物學とすなどゝ云へば、仲々立派なるも、その實は動物は夕ッタ二人、動植物は各數人づゝと云ふ有樣、卒業生のある年とて

尤も考へて見れば無理はない。下作な言葉で云へば『理學士では到底めしは食へぬ』からだ。かのモトイレと稱へて、他日回收の目的で息子

を貢ぐ父兄達が、同じ入れるなら、金になる醫科や法科、工科に入れたがるも道理である。

著者の友人に本田親二なる理學士あり。昨四十一年星學科を首席で卒業した逸才、是が他の科なら早速買手がある處なれど、星科では一寸困る。また御本人も悠々として迫らず、敢へて售らん哉を叫ぶ事なく、時々よこす手紙にも、

『僕、今後の大方針は不變だが、月給は向ふ四五年は取らぬつもり。食へなくなつたら國で百姓をするよ。此頃人生は馬鹿に悠久に想はれる樣になつた。明日死んでも惜しくはないが、計劃は百年計劃で行動してるよ』とか『この頃はのん氣である。遊んでは居ない。絶へず何か研究してゐる。心は太古の如く落ちついて少しもセカ〳〵することなきを喜ぶ。人間は目的に拘泥すると氣が急く。先の事ばかり考へて目前の事に全力を注ぐを忘るゝ、何事でも己の全力を盡してなすならば、それが完全なる經驗で、その連鎖が完全なる人生だらうと想ふ。この見解には天文學上の根據があるが、葉書には一寸書けない』なんかと、達觀した樣な事を書いてゐる。

著者かつて地質學研究室を訪ふた。大廣間の壁悉く地質の分布圖や、前世紀動植物の繪ならざるはなし。木卓に倚る二人あり。大學院の學生らしかつた。高等學校時代の他の同窓は、ネクタイの色を氣にしたり、女が眼についたりして困る年輩であるに、この兩人は襟にアカのついた脊廣をきて、眞黒の子クタイを着てゐた。一人は手にせる石を指さして、三千年前のものだと云ひ、他はモット古いと駁す。あゝ記憶せよ諸君、この室を出でゝ西する一町の通りは大學表門で、行人つねに流るゝ水の如く絶へざる事を！シカモ學に忠なる二人は場所と時とを忘れて、三十世紀以前の遺物たる一片の石を論じつゝあるのだ。

『是でも一生である！人生である！』

著者ひとり胸の底に叫んだよ。又た。或時は麻布の天文臺へ行つた。飾らざる身なり、青白い顏、延びた髭――何ぞ夫れ銀行會社員諸君と異なれるや――部室には月や星の額が懸けられたりと云へば、ハイカラだなと早合點されるかも知れぬが、笑んぞ知らむ、月も望遠鏡を向けられては、熄火山が寫つてゐて、全くジヤンコ面でお話にならぬ。木星も帶の樣な環がヒツついてゐては、沒風流千萬シカモ臺員はソンなことにお關ひなく、北斗欄干と輝いて露しきりに下る深夜、高塔に立ちて、かのベツレヘムに輝きし以來、千九百餘年かはらざる群星宿を仰ぎつゝ、新月を究め、彗星の尻を追ひ、流星を眺めて、テレスコープを妻とし、一夜を明かすに至つては詩的か、出世間的か、超人類的か――

『オヽこゝにも人生はありけり』と再び嗟嘆せざるを得なかつた。實に局外者より見れば沒趣味らしく、當事者には無限の趣味あるもの、是れ理科大學である。サレば一般の愚夫愚婦や、兒女からは度外視されても無理ならぬ事。あ

る半可通の隱居樣は、理科は金持ちの坊ちやまの、ツムジ曲りが入るに限る！と云つてゐる。蓋し半面の眞理なきに非ずである。

實に本科は無茶に金を要れねば研究が出來ない科目である。地震學教室が震災研究の爲め深井戸を掘つた如き。千四百尺を七ケ年かゝつた如き。又た地震計に振動を及ぼす恐れありとて、赤門前に電車を許さぬ如き、ブロークン、テレスコープの一寸角位な口に、蜘蛛の絲を張るに大の男が、一ケ月かゝつた如き、經濟と、シヤバツ氣を超脫せねば出來ぬ處だ。卒業者の職業は敎員八分に技師二分で、最初の俸給は四五十圓也、と何かにあつた樣に覺へるが、どうも怪しい。

要之、理科大學とは敎授始め純學者のゴリ〳〵で、世事にかけては有髮坊ちやんたる者多く、學科は趣味を解せぬ者には全く蠟を嚙む如きもの。但試驗は左程六ケ敷なし（規則書には二回以上續けて落第する時は退校さすとあれど

も、ソンな間抜はまづ無い。人類學の坪井博士の如きは實に點が甘いさうな）卒業後富貴榮達を希ふものは、まづ敬して遠ざくべき學科だ。

工科大學

△工科出身者の賣れ口月給如何▽

六分科の內で、平均年齡をとつて見ると、理科と工科とが、一番若い。まづ左表を御覽下さい。

三年間卒業學生平均年齡表

年次／分科	明治三十八年	明治三十九年	明治四十年	以上三ケ年總人員ニ就テノ平均
法科大學	二十七年七ケ月餘	二十七年十ケ月餘	二十七年六ケ月餘	
醫科大學	廿八年十一ケ月餘	二十七年九ケ月餘	二十八年一ケ月餘	
工科大學	二十五年十ケ月餘	二十五年九ケ月餘	二十五年九ケ月餘	二十五年九ケ月餘
文科大學	二十六年九ケ月餘	二十六年六ケ月餘	廿五年十一ケ月餘	二十六年五ケ月餘
理科大學	二十六年三ケ月餘	二十　六年　餘	二十五年七ケ月餘	廿五年十一ケ月餘
農科大學	二十六年四ケ月餘	二十六年四ケ月餘	二十六年四ケ月餘	二十六年四ケ月餘
六分科大學總人員ニ就テノ平均	二十七年一ケ月餘	廿六年十一ケ月餘	二十六年八ケ月餘	二十六年十ケ月餘

年齡ハ各卒業ノ月マデヲ算入ス

即ち數へ年にしても二十六で學士樣となれるわけで、今は昔、ある時代の如きは、十八歲で工學士となつたのもあつた由。あまり試驗に苦められずして、卒業後、スグ金になる處から、才子肌の學生多し。科を分つて九ツとしてるが、どの科が賣れ行よろしきか。今、著者の友、渡邊六尺子が、本年正月の雜誌太平洋のために書いた中を拔いて見る。

一、土木學科――近年まで好景氣なりしを、昨年より、賣口減少せり。蓋、經濟界不振の爲めならむか。將來有望の科にあらざる樣也。

東京帝國大學

二、機械工學科――一時は不景氣知らずと云はれしも、日露大戰後、一頓挫を來せり。こゝ四五年もすれば、需要恢復せん。

三、造船學科――これも日露のお影でポコペンとなつた科なり。現在日本の貨物が、三倍に增さねば、一時劇增した船舶以上に建造の必要なしとは情ない次第ではある。

四、造兵學科――入學の時、少數を入れ、卒業生を少くしてるから、賣れ口はよい。

五、電氣工學科――歐米人の工業眼から見ると日本の電氣事業など子供みたいな物だもの。斯界發展の前途は洋々たる大海の如し。從つて、今後十年位は、景氣と不景氣とに關はらず、ドシ〳〵賣れるであらう。

六、建築學科――無敎育の叩き大工に造らせておいては、立派な家は出來ぬ。ソコデ本科出身者は就職しやすいさうな。尤も人數の少ない點も、あづかつて力はあるが……

七、應用化學科――現時の如く資本家が、財布の口を締めてる狀態が續くやうでは、ウダツのあがりツこはないテ。

八、採鑛冶金學科――所謂ヤマ師と共にやる仕事だから、頗る冒險的の性質を具備し、下手をやると、食ひはぐれる處か、トンダ目にあふ。本學、各科中最もプアーな地位にあるもの也。

右の譯なれば、食はんが爲めに學ぶものは、最初によく研究をやつておかぬと、後日おや〳〵と自呆するに相違ない。就職當時の月給は其の人物によつて差あるは無論なれども、平均五十圓だ。臺灣や樺太へ配せらる男は七十圓もとるとやら。是だけあつたら一家を支ふるに充分だ。何でもよいから、ヘコたれずにドシ〳〵働くが、最終の勝利を得るのである。カーチギー曰く『常に幸福ならんと欲せば、常に働け。』と、これ處世のモットーである！

△中學生は眉に唾を附くべし▽

苟くも中等教育を受けたものは、誰しも身に覺えがあらうが、あの時分には、大學が馬鹿に難有かつたものだ。大學生、とりもなほさず、大學者で、教授、さながらの神樣と拜まれた。されど、聞いて百文、視て十文とやらゝ、上京して面と向つて見ると、さて難有涙もこぼれぬが妙なり。否な〳〵、中にはこんなツマラヌ人であつたかと、口惜涙が出る位なイカサマ學者もある。大學生だつて同じ事。中學生が想像する樣に皆な氣の利いた男でなくて、玉石混合——それも石の方が大部分を占む——で、實地を知れば畫狐にダマされた如く感ず。勿論、澤山ゐる中には天才も秀才も居る、現に吾輩は『あゝ好漢。願くば健全なれ』と心ひそかに祈るやうな好大學生も知人に持つてゐる事を喜むでる。されど、多數は息をする字引、道樂をする解剖書。帝國大學が、城壁を高うして、他校とあまり交はらぬのも、ボロを出すまいと云ふ下心もあらうよ。

一體が帝國大學は、學術の蘊奥を究める目的の外に政府の爲めに、良となる人材を作るが暗默の附帶條件である。されば、政府の中軸たるべき、學士に限り與ふるもので、同じ文官試驗を及第しても、私立學校の生は、恐ろしき內規と云ふものに支へられて、或る程度迄より進まれぬ。官學は、力のあるだけ昇ると云ふ次第、論より證據、各縣の知事は、追追秀才學士の領する所となりつゝあるではないか。故に吾輩は主張したい。中學生諸君は、先づ大學の眞相を知悉し給へ。と、シカシ秀才も私學よりは澤山ある事故、其の仲間入りをして勉強し、卒業の上は政府博徒の御用を承る心算なら入學せられよ。私學ではトテモ（と思ひ切つて極端な言葉を使ふ）官吏として成功出來ない。其の代り、官學は民間にあつて活動するには適當でないと云ふ事も承知せねばならぬ。たゞ何も知らずに大學に飛び込んで後悔し、おうやおやと失

望する人あらんにはお氣の毒と、いらぬ惡口をきく次第である。

△糞包と腥坊主▽

河流滔々、日夜流れて變らねど、これ、もとより昔の水でない。帝大興つてすでに三十餘年、日に月に隆盛になつたが、昔の學生は去つてあらず、從つて風俗の推移、趣向の變遷。それは〳〵大したものである。今日のことは耳目に新らしいから、筆を染むる迄もないが、昔の狀態は書く必要なきにあらずだ。一概に云へば、昔は亂暴であつた。大學南校時代の寄宿舍は宛然たる梁山伯で、今の一高の自治寮に一をかけたもの。當時の舍生、石橋思案氏の言に據れば、夜間便所に行くを厭ふて、賄の藥鑵に小便をたれ、糞は味噌の如く竹の皮に包むで、垣一つあなたの空地へ投げたものもあつたさうな。然るに或日折惡しく、巡回の舍監先生の頭へ例の包みが落下して、小便事件迄バレて仕舞ひ、舍生全體から拳固を頂戴した。小喜劇もあつたとやら。

賄征伐も激烈を極め、或時は首魁が放校された。或時は校長の耳に入り、一同散々油を絞られ、果ては謝罪の意を表せとあつたから、主だつた者十二人。黒髪、剃りこぼつて坊主となつた。

翌日イザ授業となつて登校せんとすると、犬は吠えるワ。巡査は咎めるワ。それでもかまはず出席して、靑道心一ダース數場の最前列にならむだ始末に、流石怒つた先生達も笑ひ出したさうな。

奇談は是のみに盡きぬ。

要するに兩方共蠻カラであつたのだ。

△痛快なるラブ物語▽

云ふものゝ、彼らとても木石に非ず。況んや靑春の血、湧きたつ輩であ

るから、蠻骨なりと云へども、時をり、氣まぐれなキユーピッドの征矢が立つまいものでもない。かつてこんな話があつた。

ある春の麗かな日。腕に覺えの法科大學生の面々、隅田川言問の邊でボートを漕いでゐた。折りしも堤の上を一美令嬢が通る。スルと其内のS某生は、何とか口實をつけて上陸し、スタコラと其の跡を追ふ。そんなことゝは知らぬ令嬢、サッサと歩いて近くの或る立派な家へ入つた。某生直ちに玄關を敲いて御主人に面會をとやつたね。驚いたのは其家の書生、髭もくぢやの青年がボートシャツの儘立つてゐるのだもの。

やがて客間に通されて、何御用かと問ふは主人。某生卒直に曰く『僕は今ん、お宅の令嬢を拜見致しました。大層結構です。僕も來年は卒業して、法學士の末班に連らなる男。妻を持つ必要がある。もし先約がなくば、あの方を頂戴出來ますまいか！』と。

主人は聞いて悅に入り『よろしい。さ程御執心なら……』との答へ。某は元來法科生の事故、然らば契約書を下さいとネダつて、緣談忽ち成就。乃公の辣腕を見よやと、顎をなでつゝ引き上げた。

早やくも一年は經つて、某生は無事法學士樣になつた。けれでも不都合にも彼の令嬢は其の以前に工學博士へ嫁してゐたので彼は怒るまいことか。シカシ失戀などケチな事はせぬ。由來美貌の女は多く薄情なもの。ヨシ〳〵今度は生的美人を貰ふて呉れむと、早速車を飛ばしたのが某女學校、校長に事情をちあけて、生徒の體格査表を調べ、身長五尺七分。體量十六貫。年齡は男兒ならば適齡の二十一。雁刀が得意で、運動會には七人抜きをしたと云ふ、折紙つきの板額みたいな女豪傑を迎へ、新婚旅行は九十里を隔つ自分の故郷迄、お揃ひの徒歩主義。腹が減れば、立派な服裝をしてゐながら一膳めしへ飛び込んで、花嫁を旺かんに恥かしがらしたさうだ。博士へ行つた變節令嬢は其後、夫

に先立たれたが、S某法學士は今、現に地方の裁判所の判事で裕福に暮らし、子供も澤山製造して榮えてゐる。

何んと諸君。奇拔なヤリ口ではないか。是も當今の大學生の推參な庇髪に首まで、、、ハマつて『物や思ふと人の問ふ迄』に青くなつたり。乃至は緣日で附け文をして掏摸と間違へられ、ブン擲られたりする、へマさ加減と較べて御覽。阿呆らしいやおまへんか。と冷やかしてやりたうてならぬ。

かくの如く、國民の中堅たるべき大學生諸君をして、女に惚れ方一つ知らぬ樣にせしめたのは何の罪だらう？　潮風生は獨斷ながら左の一項を以て答へとする。

△大學生の角帽中毒▽

中毒と云ふことは、河豚食つた報いで病氣になつたり、エタイの知れぬ菌類に、腹痛を起すばかりを意味する外、廣く考ふれば、他にも澤山ある。事大主義に中毒せる朝鮮帝國、借金中毒の某自稱一等國、妻君中毒のゴリラ博士、美人中毒の風流宰相など、其の一例だ。而して、

帝國大學生は角帽中毒で御座る。

仰も角帽なるものは、學生の品格と威嚴を保つ爲めに作られたもの、所謂『スクエヤーハット、エンド、ガウン』が大學生の正裝であるのだ。シカシ、是は繁文縟禮の英國や、ヤンキー氣質の米國に流行してるもので、學術の府たる獨逸では、かへつて、正帽なんか無いのである。

吾が帝國大學では、例のお役所的特徴を發揮せしめん爲め、彼の角帽を參考として、帝大式のものを作つたのである。それは明治十九年の頃で、林權助、石橋思案兩氏外十數名が、制定委員だつたさうな。幸にも、この新型帽は天下學生社會羨望の中心となり、私立でも大學とし云へば、同じ帽を正帽とする樣

な次第とはなつた。

帝大生、豈得意ならざらんとするも得べけんやで、角帽を王冠の如く心得て冠りまはる樣になり、又た世人もこれに相當――イヤ過分の敬意を拂ふを悔いぬのである。

新聞の三面は往々にして、角帽と女學生との艶種を擧げる。浮薄なる繪はがきも矢張此の兩者のポンチを書く。角帽を冠れば、到る所に、光る源氏の君の樣にモテて、ヤイノ〳〵と騷がれると云ふ。

學生、其人は順風に帆かけたつもりと意張つて居れど、其の中毒の及ぶ所は、『おめかし』となり『虛飾』となり『空威張』となり、學問は日に日に緣が遠くなる。文學の蘊奧を修めても、沙翁の十分の一の作物も出來ぬ。理科を學んで、ニユートンの靴の踵にだも及ばず。醫科に遊むで、藪醫者によりなれぬ。さりとは平仄が合はぬと思召す諸君もあらうが、それも其筈一年三百六十五日。

其中をヤレ休暇、ヤレ日曜だ、祭日だと騷いで三分一は休むで仕舞ふのだもの、四年の歲月があつても正味勉強するのは二年強位ゐ。それでも口幅の廣い事を云ふからお座がさめるでないか、

尤も社會もいつ迄も其の手は食はぬ。今日では學士の稱號も識者の耳には何等のオーソリチーを償ひせずなつた。されば彼等も赤門を出た當座湯氣のホヤツク間は分に過ぎたる望を抱けど、實力ある秀才の外は買手一人も無きに困じて、あゝ沽らん哉、沽らん哉と折れて出て、二束三文の官吏教員、乃至は師になる。

かくて獨身では不自由なりとて結婚すれば、『女房が出來、子供出來、借が來』の始末。苦しむ者は藁でもつかむ。宿昔青雲の志もどこへやら飛び生て、食はんが爲めには、手段をいとはぬ稼ぎ方、不朽の著述を遺さずば止まと叫んだ文學士が、斷編零冊の製造に腐心し、醫界に貢獻する所あらんと誓つ

た美髯醫學士が、大醫のお婿樣になつて、その儘に無意味な一生を過したりするのだ。吾人は帝國最高の學府と自他ともに許すからには、今少し意義ある教育を施してほしく思ふのである。

駒場農科大學

珍妙なラッパぶし――假すまひ的寄宿舍――田舍武士にさも似たり――汗涙ともに流る、實習の苦しみ――ドシ〳〵世界に雄飛せよ

△珍怪不思議の喇叭節▽

▲駒場を出で、二十年、今ぢやテキサス大地主、秋や小鹿の鳴く頃は、黃金の波が九萬町。

▲アリナレ河は幾千里、岸をひたして晝くらき、森の木魂に響くのは、日本男兒が斧の音。

▲見わたす限り白雲の、アルゼンチンの大原野、わしの牧場は耻かしや、僅か羊が五萬頭。

こゝに掲げたのは、目下駒場の農科大學で、大流行のラッパ節である。同校は青山の電車の終點から數町、中澁谷より右に折れて、春ならば陽炎の立つ道――秋ならば、薄の招く道をドコ迄も眞直に、突き當つた所に建てられてあるのだ。

面積約十九萬坪、其の廣き事は法、文、醫、理、工を合せた、本郷大學でさへ遠く及ばぬ所。小山あり、養魚池あり、牧場あり、溫室あり、其他、鳥闕する、あらゆる設備は整へられて、篤學の士を待つて居るのだ。

世人は、一口に駒場の書生さんと云へど、先づ角帽の大學部と丸帽の實ある事を、知らねばならぬ。次に、大學部は人員二百八十人で、農學科、

化學科、林學科、獸醫學科の四科に分れ、實科は三百人弱、大學部に比してた だ農藝化學科の無いのと、高等學校を修業する必要がないから、三年間で一人前になれると云ふ點が違ふを頭に入れて欲しい。

現學長は松井理學博士、學問は大して無いが、古顏だからなア、とは、誰やらが内證話、多分ウソで御座らう。敎授には擔任の農政はチットもやらずに、出鱈目を講義してゐる和田垣法學（寧ろ螺？）博士、出來ぬ答案にはマイナスをつけて置いて、次回の得點から差引くと云ふ石川千代松博士、滑稽百出の本多林學博士、新發明に腐心せる三村鐘三郎學士を始めとして多士濟々。幹部の人々には、校内に官舍を設けて、置いてあるさうな。

△大陸的寄宿舍▽

帝國大學も昔、大學南校と稱した時代には、寄宿舍を設けたものだが、今は無い。たゞ、駒場大學に一ツあるばかりだ。

左樣建てられたのは、明治十五年頃『駒場の異人館』と俗稱せられ、わざ〳〵見物に來た者があつた位。シカシ盛者必衰の理はこゝにも洩れずして、さしもの異人館君も寄る年浪を拒ぎ得ず、辛うじて命脈を維持してゐる。寮は五棟に別れ、生徒寮と呼ぶは大學生、第一より第四までは實科生が入つてゐる。自修室は十八疊位の土間に定員五人。高机と椅子を無造作に置き、下駄箱と本箱とが隣りあつてるなど、頗る奇觀、寢室は一高式の萬年床、但し、蒲團は時々干す樣だ。食料は六圓で安いが、其代り人間の食ふべきものでない。勞働して腹の減る彼らだからこそ食へるのだと、轉た、感心に堪へぬ。舍費は僅かに七十錢。それで夜は古風なランプが點き、冬は部室の中で肌をぬぐ事が出來る程にストーブが焚けるとは、流石に官立の有難い所なむめり。勉强したい奴は無暗にやる。遊び好きは馬鹿に遊ぶ。菓子が食ひたくなれば、小使部屋から、五厘

の大福や、三つ一錢の最中を五錢も買つて來て、番茶を飲むで、太平滿腹を歌ふのが關の山。同じ大學生でも市中の者のごとく、卒業後、名家のお婿さんにならうとか、局長の御機嫌をとつて洋行させて貰はうとか云ふ、ケチな野心が無いだけに、無邪氣で暢氣だ。何しろ學校の萬事が大陸的なのだから、學生もさうなつて仕舞ふ。『浮世は假りの宿り』と云ふが、こゝに來つて特に其の感を強うす。要するに、飽くまで、田舍武士的で、間の拔けた樣な、拔けぬ樣な、奥底の知れぬ人物が居るらしい。

△土百姓の眞似▽

學生はすでにかくの如く放膽である。暢氣である。シカシ、一つ苦しみがある。即ち、實習――語を換ふれば、百姓や木こりの練習だ。林科の生徒はつねに歌つて曰く。

（一）朝から晩迄テク〳〵と
鉈や鋸鎌や鍬
是も前世の因果かや

（二）日はヂリ〳〵と焼きつくし
泥手で拭けば折角の
拳固で拭かうかどうしやう

（三）眞面目になれば面倒だ
幅も廣いが徳用だ
按摩の三日も呼ぶべいか

（四）まだ十時とは情け無い
まゝよ内證でやつゝけろ
而かもお米は舶來だ
箸より外に持たぬ身の
もぐらの眞似、けらの眞似
汗はだく〳〵流るゝを
お顔も臺なし玉なしに
逆さに植ゑても大事ない
オヤ〳〵腰が痛いわい
おらが時計は腹時計
ほい〳〵例の梅干か

（五）ランシットを据つけりや　疏動や微動で八ヶ間敷や
夜もろ〳〵寢られない　ロガリも絲瓜もあるものか
コンモンセンスが第一サ

（六）器械を据えて眞面目顔　夢中になつて何を見る
望遠鏡が動き出す　生きた彩柱の美しや
村の娘が通るのか

（七）腰辨當をぶらさげて　今日また例の草苅りか
これではとてもやり切れぬ　實地と云ふはつらいもの
雨の十日も降ればよい

一週の授業時間三十五時間の内十五時間は實習であつて、汚ない作業服に着かへ、農科は田畑を耕し、林科は伐木、苗の植つけをやる。夏は日に燒けるやら、冬は手が凍えるやら、どうした因果で、こんな憂い目を見るのやら、是も誰故と、大きな男が、汗と共に涙を流したくなることもある。けれども、艱難は人を璧にす。この辛抱が出來ぬ樣な、骨なし共は、談ずるに足らぬ輩。駒場健兒から除名すべしだと故參は息まいてゐる。

樂しみは何？　實習終つて湯に入り、大食して後、窓に倚つて雜談するがよいと云ふ男もあらう。月、大空に横はつて、萬物、皆な一つ光りに包まるゝ夜、校内を微吟してあるくに、在りと田園詩人を氣取るもあらう、それよりは。早起して、冷水浴一番の後、軟草の白露、踏みしだいて、家畜病院に、病獸を訪ひ、溫室のあたりに、百花研を競ふを賞し、更に丘に上つて、瞳々と東の空を昇る、朝暾に對して深呼吸をする時にありと主張する、朝おき三文の德的論者もあらう。三文と云ふて思ひ起す樂しさは、鄕國から爲替の届いた日――オツト、こいつは云ふまいぞ〳〵。

△太つ腹の人傑出でよ▽

以上述ぶる所を通觀するに、帝大にも色々の黨派あるを知る。ハイカラ黨は腰拔、卑屈、キザ、愚劣、虚飾等の俗惡分子を含み、士君子の風上に置けぬ奴閥閥を頼んだり、教授におべつかるが關の山、眞面目な研究など夢にも出來ない。勉强黨は、感心に讀書をするが、惜い哉多病だ。學士の稱號を授かる時分には附錄として、肺病、腦神經衰弱、胃病、心臟病などの中、其一つ乃至二つを頂戴する。どうせ餘命は知れたもの、チッとやソッと秀才でも、大日本のお役には立たぬ。次は平凡黨、學問も才氣もなし。と云ふて別製の阿呆でもなしと云ふ代物。要するに皇國の興廢に關係なしと知るべし。最後に腕白黨。學力はアマリなくとも、覇氣滿々、何か偉業を建てたいと人しれず計畫するやうな變物、下手をやれば、天下の逸民としで志を成さずして終るが、ウマクやれば、凡俗蚊學士、呆學士以上の名を成すこと易々たりだ。而して管見を以てすれば、此の種の男、大自然を師とし友として、愉快に日を送れる駒場に多い。例のラッパ節にも、

▲アンデス山は幾千里、カカオの實がなる。金がなる。お前も明治の男なら、そんな小島に居られまい。

なんかと、抱負の一端を露はしてゐる。贊成！　贊成！　日本は一等國の何のと威張つても、面積タッタ四萬方里にして、人民五千萬。大半は愚なり。勿論、西洋人にも馬鹿多けれど、中にはズバ抜けた俊傑も居る。世界と云ふ檜舞臺で、彼れの傑物と雄を爭ふも亦た愉快なり。いかに大學は官吏養成所だとて時折は、平凡を破る太つ腹の人傑も出でよ。徒らに蝸牛角上に雌雄を競ひ、石火光中に長短を較ぶるは、二十世紀の男兒の業では御座らぬ。聞く處によれば學校當事者は、本科の角帽を學生と呼び、實科の丸帽を生徒と呼んでるとや

全く無意味な邊に別け隔てをするではないか。さればどちらの根生もヒテく、て、社會へ出ても、黨を結び、閥を作つて互に反目してゐるのだ。笑ふべき哉笑ふべき哉。ソンな膽ッ玉の小さな事では、トテモ天下の英雄にはなれませぬぞ。愚圖々々云ふ間があつたら勉強して、世界に乘り出し給へかし。敢て申す

第一高等學校

車掌然たる破帽書生＝古城の樣な寄宿寮＝一ヶ月十二圓の學資金＝藤村操と幽靈部屋＝ホールがなければ夜があけぬ＝欣すべき籠城主義＝ストーム、寮雨、萬年床＝バイカル博士と德富蘆花氏＝ステツキの雨＝下駄の霰は大閉口＝變化しつゝある思潮＝十年後が樂しみだ

△薄ぎたない主義▽

東都學生界の腕白坊ちやまたる一高生つねに、自ら歌ふて

『わが寮生は男子の粹、劍橋牛津何かせん、二條の[illegible]相葉の章、頭に

まとひ、身にぞかはる……』云々と、

さりとはチャンチャラをかしい哉。この電車の車掌然たるお姿の田舍漢が、男子の粹とは臍茶の至りと、指笑するハイカラ書生もあるさうなが、彼らは一向平氣である。超然として、爲さんと欲するを決行し『車掌』と陰口つかれても『宰相』と褒められた位に得意でゐるのは全くエライ。著者は學生らしき學生多き學校として、はた、蠻カラの殘壘を保てる健男子として、彼等を敬愛する世にはツムジ曲りなる一人種あり。彼等を目して、衒ふ者となす。シカシ、蠻骨を衒ふは、ハイカラを衒ふよりも無邪氣でかつ、經濟ではないか。

△一高はどんな所▽

一高の位置は御承知の向ケ岡、帝國大學の赤門前を進む約三町にして、『[illegible]高等學校』なる門表、風雨に黑める前に出づ。門に向つて左側に受付あり。[illegible]

係なきものは一歩も入れじと頑張つて控ゆ。天下無雙の融通のキカぬ親父で、來訪者にケンツクを食はすので有名だ。シカシ、犬は知らぬ奴に吠える程、忠犬だと理窟を云へば、ゴテ〳〵苦情をならべる門番は學校の爲めには賞すべしであらう。

門を入つて仰げば高き、本館の煉瓦造りの頂上に、一きは秀でゝ時計臺が聳えてゐる。左に道を取れば自治寮へ行く。春ならば、櫻美しく、若草萠えて、下手な天國を步む心地——とマア褒めて置かう。本館の建物盡きて、木造ペンキ塗の分館あり。一寸變つてるのは生徒控室の揭示。或は『告！』と書く。『嚴冬やうやく去つて、春風向陵の空に吹き、健兒の精氣萬朶の櫻花となつて發す。鳥韻は朗々として……』なんかと、中學生の作文みたいなものを、長つたらしく記してある。シカモ、それが廣辭字典でも引かねば解らぬ字を、アチコチに挾むであるのだから閉口。聞けば、一高生は枕言葉然た

る鵜美文は拔きにして揭示の終だけ見るのださうな。成程さうせねば、トテ肩が凝つてやり切れまい。

分館の裏に發電所あり。學校の電氣燈は皆な此處から供給するのだ。去年四月九日未曾有の大雪にも故障なく發電が出來たと威張つてる。小面が憎いが、事實さうだから致し方なし。

發電所から運動場が見へる。其の左の隅に巡査の派出所然たる物置きを置いて、二十本近くの樹が生へてゐる。是ぞ、一高八景の隨一で小便の森と呼ぶ。蓋し、運動場にゐて便意を催せば、スグ駈け込むでやつゝけるからの由。

更に、露深き夜、小便の森より大月、まどらかに昇るは美しいさうだ。お月樣もトンダ所に引き出されて迷惑だらう。

寄宿舍は總計六棟、暗夜遠くより窓もる灯の輝くを望めば古城の面影がある。

と申す人がある。

△寮の由來と其生活▽

一高の歴史を語らんとせば、先づ其の寄宿舍、即ち、自治寮の沿革を、述べねばならぬ。

明治十年四月、大學豫備門開設の事は略すとしても、十九年第一高等中學校と改稱してからの事は是非入用だ。天下の學生悉くハイカラ輩星宗に歸依する時、本校獨り、禪坊主的生活を續行せるは、理由のある事である。理由とは籠城主義を採つたのに因る。

二十三年二月、現東京帝國大學總長、當時、本校々長たりし木下博士は、新たに南寮北寮の二寄宿舍を設け、『本舍の設置は通學の便を計れる爲に非ず、現代の潮流が、放縱横肆に奔るを激し、この寮を造り、これに倚りて狂瀾に抗せん』との要旨を演説し、同時に自治制を敷き、全國學校に率先して、四ケ條の憲法的綱要を守る外は、學生の自由に任じたのだ。

下つて明治三十年、所謂南北寮事件と云ふ騒動の後、七萬三千餘圓を投じて南、北、中の三寮を增築し、皆寄宿制に改め、三十七年旅順包圍中又々一寮を加へ、乃木將軍の名を冠らして朶寮と呼び、籠城全く完成したのである。

△女人歡迎の紀念祭▽

その活動は初秋九月。桐の一葉をキツカケに始まるのである。其の頃試みに本郷の通りを通つて見給へ。例の車掌姿の學生が五歩に一人、十歩に三人、樂しげに歩めるを見るであらう。帽子、袴の新らしくして、比較的ポカンとしたのは新入生、敝衣の者は、自治寮に少くも一年以上居たものと判斷すべし。或人は苦學生スタイルと罵り、或は破戒禪僧の如しと嘲る。シカシ彼等は牛の角に蚊の止まつた程にも思はぬ。何となれば、得意の絶頂にあるからだ。——

特に其の感は新入生に多い。彼らは、中學初年級時分から、夢の如くに一高を外形を畫がひて慕つてゐた者だ而して今や、其の憧憬ゝ學舍の一員となり、横行するのだもの、嬉れしがらざらむと欲するも豈得べけむやである。彼らは選拔試驗及第の報知に胸とゞろかし、入寮式の會合に職員連が、價にすれば、たか〴〵十數圓の安い敎授服を着てゐるのに、難有涙を流し、內外の博士號四つ。肩書二つを有せる新渡戸校長を見て、おれも早くあんなにならうと思ふなど、あれやこれや、中々急がはし。

秋更けて、楓葉、血の如く紅に、月清き夜は不忍池の方角より雁わたる頃になると、新入先生、大分慣れて來て、賄を叱り飛ばす術も覺へ、最初には『所も知らぬ、名も知らぬ』イケすかぬ奴と思つた男とも、學友になつて、一つの柿も半分づゝ分けあつて喰ふ樣に仲がよくなる。學校では三日がけの發火演習がある。野球仕合がある。向陵健兒多事、多趣味の時期である。

一高の冬は勉強の節。夜はスチーム、パイプ通れる自修室に、同窓、膝を交へ、肘を接して先哲、前賢の研究に費す。運動は寒稽古旺んだ。

正月は來り。而して逝き、春は一樣にこの超然主義の古城にも訪れる。如何に理窟をコ子ても花は美しいものにキマつてゐる。一高生も禪坊主的に澄ましても居れぬ。そこで、紀念祭の準備となる紀念祭は自治を許されたのを、永く忘れざらむ爲の催しだ。一ケ月も以前から學科ソッチ除けで、色々趣向を巡らす。先づ各自の部屋に造り物をする。文科は文科らしく、詩的、哲學的のものをこしらへる。ダンテの神秘劇なんか云づて、たゞ部屋を眞黒にした事もあつた。萬事この調子。工科や理科になれば、小鐵橋をこしらへたり、小水車をこしらへたりして又た一段のウマ味がある。かくて、當日には特に女人禁制き、葷酒でも何でも校門より入るを許し、大學生までも、一高時代の昔に つて、若い學生と共に騒ぐ、餘興は、角力、假裝行列、それは〳〵は校

ングリかへる樣な大喝采。一日の入場者五萬を算すると云ふ。

櫻の花が咲けば、ボートレースがあつて、亦もや一と騷ぎ。どこでも學生は花時に遊ぶものと見へる。是を思へば、花が咲いても時間通りにテクつく腰辨は、ミヂめなものだ——と云つたら、一高生曰く、僕の方は金を拂つてるから遊べるのさと云つた。

世は新綠の候に入り、衣更へて風薰る頃から、一高は試驗の方の用意になるそして暑中休暇。歸省。こゝに向陵の一年は終るのだ。これを落第せずに三年繰りかへせば、卒業で、大學に去る。シカシ、もう、昔の樣に面白くなるとは大學生の自白する處。若い時は二度ない。青年時代は勉強の餘暇はウンと遊ぶがよし。青くなつて失戀の、煩悶のと云つてる奴は、生涯快樂を知らずに終るもの也。

△旺んなる哉寒稽古▽

本校は徹頭徹尾、英雄崇拜主義である。何でもズバ抜けて居れば幅が利く。學問が出來れば秀才と尊ばれ、運動家はチヤンピオンと稱へられ、雄辯家は辯士と敬せらる。酒がウンと飲ければ、豪傑の名五寮を壓し、虎髯なればオヤヂの株は與へらる。されば學生はどうにかして、コンマ以上にならんと努力するが爲め、他の高等學校や專門學校に比して、ヨリ多く變つた傑物を産するのだ殊に此の現象は寒稽古に著しきを見る。

春とは云へど舊曆の師走、炬燵にかぢりついたら最後動かれぬ頃を、一高健兒奮起して、深き修養をつむのである。

有明月夜、時計臺の針が三時に垂んたる頃、運動場を訪ふて見給へ。彼處にオツチニ〳〵と懸け聲勇ましく、レースの練習をなすあり。こなたの森かげで

は、未來のデモスセ子スが、『諸君吾輩は――』を叫ぶ。柔道や劍道は無論大繁昌。剛の者になると、一ケ月に二千本はやるさうな。ピアノや、習字の寒稽古迄やる者さへ少くない。序に云ふておくが、このピアノは日本にタッタ三臺よりない尤物で、學習院女子部と、音樂學校、そして理科大學に配附される處を大變のが誤つてこゝに運ばれたのだ。久しく倉庫に蒙塵してたのを、日本中學出身の楠本某なる音樂狂が發見して、愛玩おくあたはず、日夕練習した結果、つひに『春爛漫の花の色』だの、『あゝ玉杯に花うけて』だのゝ譜を作成した、但、あまりに凝りすぎて、三度續けて落第し放校になつて仕舞つた。是らは出來そこねの英雄なれど、中には古英雄にも恥かしからぬ俊傑を出だすが寒稽古の特色である。それから又、在學生の元氣を鼓舞して、奮發心をおこさしむるは、出身先輩の勳功のかずかずだ。

△藤村操と幽靈部屋▽

彼らの寮舍は二十年來のものであるから。入れかはり〳〵住んだ人間には、社會に頭角を露はしたる人物雲の如く、林の如し、大抵の部屋は何博士がゐたとか、何縣知事がゐたとか折紙つきである。乃公の室は奏任官が四人迄出たよなんかと語りあひ、吾も他日其のあとを追はんと心がけるである。

尤も多數の中には不祥なる先輩も少くない。東寮の三號室の如きは、華嚴宗の開山、藤村操の居た部屋だ。月あかく玻璃窓よりさし込む夜の二時頃、をり〳〵、血だらけな腕が、天井板の剝がれた間からニューッと現はれるなどゝの噂もある。又た暴風雨の晩、灯の薄ぐらい廊下を通つたら、濡れしよぼになつた青年――藤村操が、隅に悄然と立つてたと話す彌次馬もある位。もとより戲談に相違あるまいが、不氣味千萬な次第ぢや。

その外、幽靈部屋なるものがある。むかし、落第を苦にして、三階から飛むで死むだ由緒のある室なのだ。元來が頗る殺氣の立ちのぼる樣に感せらる室でドンな快活な者でも憂鬱性に傾くのである。夫れかあらぬか、その後も自殺者を二人續出せしめたので、今ば物置同樣にされてゐる。ときく〳〵強がりの男が無理に泊つて見たが、恐ろしい怪物に出られて逃げ歸つたさうな。恐ろしい怪物とは何かと問へど、彼はたゞ眼の色をかへ、口をつぐむで語らぬからわからぬが、何でも大變なお化だと云ふ評判だ。

△欣すべき籠城準備▽

筆は思はずイヤな話に走せた。立ちかへつて陽氣な事に移らう。他の事でない。コンパニー談ぢや。即ち俗に云ふ阿彌陀くぢである。一高生は略してコムパルと申す（是れ一高語で、梅月へ菓子を食ひにゆくを、バイゲル、圖書館へ詰め切るを、カンヅメ、門前のそば屋へ進擊するをモンゼル。牛耳を執るをギユウジルの類）

大概は夜分で、一室十人五錢位づゝ出しあふて、其の一人が買方となり、ノコ〳〵出かけるのだ。やきいも、南京豆、もちがし、果物なんど、大風呂敷に一ぱい買つてくる。小使部屋から茶を持つてきて、御馳走を腹に流し込みつゝ騷ぐのである。羅漢まはしをやる。寮歌を叫ぶ。興到れば、大いにデカンショ節をとなるのだ。

▲デカンショ〳〵が、赤門の前で、おでん、燗酒、いなりずし、ヨーイ〳〵デッカンショー（蓋、はじめ、一高門前にイナリズシ屋が毎晩店をおろし、風儀を案したれば、立のきを命ぜられ、今は赤門前にあるを以て也）

▲丹波篠山鳳鳴の塾で、文武錬へし美少年ヨーイ〳〵デッカンショー、

▲御幣かついで眞暗闇に、野中、山中がさ〳〵と、ヨーイ〳〵デッカンショ

一、

など、、中々旺んなもの。大抵の事は舍監も默許してるので、面白い事限りなし。

コンパニーに亞いでの樂しみはホール（大講堂の俗稱）である。こゝに、そばあり、汁粉あり、菓子あり、果實あり、大ひに食つて騷ぐだけの準備が出來てる。訪問のお客樣も引つ張り込めば、本校出身の大學生も昔の味を忘れ得ず頻々やつてきて、假面を脫いで無邪氣に遊むで歸る。一寸珍妙なのはその呼び方だ。

『おいホール早く來んかッ！』

『ホール乃公の方へも大急ぎで一』

などゝ云つてゐる。雨の降る日などは滿員の有樣で、ホールがなくては夜があけかねる位だ。

何しろかやうに食物が充分の上に、浴場、水浴場、醫者、病室、圖書館、道場、弓術練習所なども具備せられてあるから、學生は籠城して勉強が出來る譯である。尤も、諸君はこれらの物質以外に、谷山生徒監の監督、よろしきを得たるを忘れてはならぬ。

谷山生徒監――モトは舍監と呼むだ。大兵肥滿、西洋人にありさうな體格、苦學獨學で今日迄漕ぎつけた人なり。その徽兵檢査の時名を問はれて、『姓は谷山、名は初七郎、鹿兒島縣の住人にして、ケツショウと號す。ケツは豪傑の傑ショウは文天祥の祥、文章は韓退之、陶淵明に遠く及ばずと云へども、アナタよりは上手です！』と叫んだ逸話のある人也。ガラクタ寄宿のデコボコ舍長と其選を異にせるがため、向陵のダヽツ子も、此人には推服してゐる。就職以來十年一日の如き功勞は多とすべきである。

由來一高生は高が中學生に毛の生へたへナチョコに過ぎぬが自身では

エライものに考へてゐる。今に大學に入つて、學士になつて、立派な人物になつて、天下を動かして——と先から先へと想像して、若き血汐を湧かしてゐるかくの如く、前途洋々たる大希望あればこそ、アマリ病氣にかゝらず、誘惑にも陷らず、こゝに天下一品の蠻骨團體は大成したのだ。

△物騷なる自治寮名物▽

『名物にウマいものなし』と諺にあるが、自治寮名物は、甘味い、不味いの間題を通り越して亂暴千萬。先づ指を屈すべきは、ストームである。

▲▲▲ストームとは、英語の嵐と云ふ字の事は、御承知の通りだ。草木も眠る夜更けに、古參醉つぱらいが、下級生の室を荒らして廻はると云ふ。特に新學年の始めが多い。

『今晩あたりキット來るぞ!!』

と警戒の聲が、飛ぶが樣に廣まる。兼ねて、新聞や雜誌で針小棒大的にストームの恐ろしき事を聞知せる新入生は氣が氣でない。消燈鳴れど、電氣は消ゆれど、天籟人籟共に絶ゆれど、どうして寢つかれるものか?眼は益々冴え、枕もとの時計の微かに『テーク、タク、タク』と秒刻むさへ、腦に響く。十二時も一時も過ぎた頃、遙かかなたの寮で、ガタ〳〵ガタン!!

さてはいよ〳〵襲來!!と睾丸縮む。

たゞならぬ物音は近づくと共に、明かになつてくる。

『丹波篠山男子の膽は、ヤア、コリヤ〳〵』

と云つた風の調子。各室へ亂入して騷いで順に來るのだ。金盥を叩く奴もある。

『デカンショ〳〵』で半年ヤ暮らす。ヨーイ〳〵』

やがて亂れた足音と共に、重い戸がガラリと開いて、二十人近くの影は雪崩

れ込む。手に〳〵灯かげ明滅たる蠟燭を持つ。

『コリヤ隅に寢とるのは誰ぢや。起ろ〳〵。苟しくも向陵健兒たるものが惰眠を貪るとは何事ぞ』など怒鳴る。イクラ向陵健兒だつて、夜は寢なければなるまい。是はストーム連の方が無理だ。但し、無理が通れば道理が引き込まねばならぬ。新入生たるものは、如何に眠くとも床の上に起きなほつて、一行を迎送する義務がある。かくて二三分ガヤつくと、彼らは次の室に去るのだ、六寮七十の室を巡る間には夏の短夜、早や東雲める事もある。こゝに化物は各々其の洞穴?に、退散し、段落を告げるのである。

此頃では其んな事はないが、昔は、ストームは鐵拳制裁であつたのだ。『奴は近頃イヤに生意氣だ』と云つては早速ストーム『昨日彼は他の菜迄食つた』と云つては、其晩ストーム。されば衝突が起つて、物議を釀した事もあり、一時中絶してたが、いつしか復舊したのである。

大學生が、ヤレ〳〵と傍から油を注ぐので駄目なさうな。

第二の名物は萬年床。二階の寢室の床は、先づ疊むだ事がない。朝、脫け出でゝ、夜、モグリ込む。不潔此上なし。シカモ、因襲の久しき、少しも之を怪とせず。現に先頃韓國の宋農部大臣の來觀の折も、枕や、寢卷がゴチャ〳〵な所を見せて、其の驚くを蔭から見て、笑つてゐたとは隨分罪が深い。

第三の寮雨に至つては、尚更不潔、冬の寒き夜――でなくとも、階下の便所に行くのが嫌いな、不性連、寢室のドアー、細目にあけて、晴夜に雨を降らすのだ。是を『寮の雨』又は略して『寮雨』と稱す。一寸聞けば歌か俳句の題にありさうな典雅な名だが、實際を聞けば、三年越しの戀も褪めて仕舞ふ

△蘆花氏とバイカル博士▽

本校の學生、職員一同で組織せるものに、校友會なるものがある。別つて文藝、辯論、弓術、擊劍、柔道、野球、ボート、陸上運動、水泳の九部となす。文藝部は毎月一回校友會雜誌を發行し、其他のものは、大抵他校のものと同じいが、たい特種異彩を放てるが辯論部だ。

其の練習日ばゝ、毎水曜の夜。聽衆が、あると無いとにかゝはらず、同志だけで根氣よく、演說し、討論をして修養をする。玉も磨かねば光なし。デモセヲスも墓石に說敎したでないか。何でも練習に限ると一生懸命になるのださうな今は法科大學の逸才とたゝへられつゝある鶴見某の如きも、特にこの主張のもとに練習したものだ。

彼の入寮當時の演說の如き、實に下手糞極まつたもので、身振りは、ヒヨツトコの踊る樣であつた。それが、不撓不屈の大練習の結果、今や東都學生論客の中で第一流の辯士となつてゐる。『御前仕合と武者修行』は新渡戸校長を驚かし、『日本海々戰の回顧』や『吾等の使命を想ふ』などにはかく申す惡口屋の著者すら、快哉を叫むだ。一生懸命になれば、何でもかうであらう。

辯論部は又、月に一回づゝ例會を開き、あらゆる階級の名士を招待して高說を聽く。中でも尤も影響を及ぼした大演說は德富蘆花氏の『勝の悲み』と云ふ講話であつた。

蘆花氏トルストイ伯訪問を思ひ立ち、露國巡禮紀行の砌、モスコーの博物館で、非戰畫家、ベレスチヤギンの畫きたる一葉の繪——モスコー郊外雀が岡に奈翁立ちて、物思ひに沈める光景——を觀て來ての所感談なのだ。

『奈翁は手を後にして默して立つ。何の畑か蓬々彼を掠めて去る。あゝ此の時の胸中は定めて物足らぬものがあつたであらう。彼は一世の英雄、シカモ今は一片の骨すら止めないでないか』と論じたのである。

『あゝ、諸君!!此の世の國を追ふ者、皆なかくの如きものであります。英雄、

得る所、何で御座いませう？　攫むものは、たゞ空虚！　空虚であります』と卓を打つた折の如き、一座シーンとして、唾を呑む音も聞えなんだ。

是を物に喩ふれば、炎の如き氏の信念は、確に帝國忠良の臣民の中堅たるべき、學士の卵――第一高等學校生に幾分の非戰的思想を吹き込むだのだ。

此の演說、時間にすれば僅々三十分あまりのものであつたが、一擧にして多大の崇拜者を得たのであつた。其の一例は先頃著者が氏を、粕谷の田園に訪ふた砌、一高生にして、氏の話を聽き、心機一轉、直に鄕里に百姓となつたものがあると云はれたのを以て知るべし。近頃噂によれば、一高當局者は、かの時以來、見へざる一種の潮流が學生間に横溢せるを發見し、大變な事をやつたワイと後悔してる由。御愁傷様な事ではある。

とは云ふものゝ、澤山の名士の中には日本茶の帝國主義を唱へる人もあるバイカル博士事、戸水寛人氏など其の最たるもので、一擧、露都を屠りかへす乃に北京を陷れ、空中飛行器に打ち乘つて月世界征伐にでも行く様な大法螺を吹く。恒心なき學生は、昨日蘆花氏の說に感服し、戰爭はイヤだ、平和な百姓になりたいと希ひ、今日は博士の壯語に浮かされて、世界を日本領としたい、青眼玉を五六匹ブチ斬りたいなど思ふそうだ。

△ステツキの雨下駄の霰▽

一高に彌次なるものあり。早慶の應援團創立以前から、已に出來てゐた。銅鑼的蠻聲を放つて敵に對しては批評的罵倒、味方に對しては奬勵的懸聲をなすを目的とす。其の最も旺んなのは野球マッチに於て是を見る。

仕合前夜になれば六寮六百の健兒、悉く嬰鳴堂――例のホールに集る。無論選手は上席に控えてる。

數番の奬勵演說ありて餘興たる歌舞に移るのだ。只見る、十餘名の寮生白

拭のうしろ鉢巻、袴短かく、ハキこなして刀を携へ、

『天地の精氣向陵に、こもりてこゝに十餘年其の春秋に錬へてし……

と云ふ樣な寮歌の吟聲につれて三尺の劍をぬきかざして一樣に立ち舞ふ。

一曲、又一曲、悲壯、痛烈、衆憤然として勝利を想ふ。

歌舞歇めば有名なる中野老鐵山、選手を代表して『月桂冠を得ずんば、一同

圓頂黒衣の徒となりて詫びん』と誓ふのだ次いで名から奇抜なる彌次司令官、

松井源水——柔道四段の猛將慷慨演説をやる。鬼の如き雙眼より熱涙迸しづて

卓に墮つる事、白雨の如し。聽者も亦た哭く。漢文口調で申せば『獻歔の聲

堂に滿ち、左右仰ぎ見るものなし』とでも形容せねば收りがつかぬ。狂熱さ加

減、流石に一高だけある。

ホールの會合は、更たけて星の瞬きしげき頃解散す。サテ翌日の仕合となれば、彌次はコークスの小山に陣どり、

『勝つて勝つて、勝つて、勝つた方がエー』なんかとワメくのだ。されど不運一高の旗色は刻々と惡くなる。彌次連はモウたまらぬ。帽子、ステッキ、下駄何でも手にあたるものは、投げ飛ばして大騒ぎに騒ぐ。いよ〳〵以て巢鴨的だ紅葉のあるのに下駄が降ると、シャレ所でない。

あゝ顧れば光榮ありし過去の歴史よ。天下の覇者と仰がれたる一高野球部されど強弩の末勢、何とやら、今は榮枯地を換えて、往時子供視してゐた南、城西の爲めに又たしてもドエライ目にあはされるのである。

日暮れて雲收まり、運動場に人影絶えて空に銀月かゝる時九人の選手は、に合はす顔なしと黒髪、ゴソリと剃り捨てて、うら若き僧の姿となれるをば誰か知つてゐるであらう。あゝ戰爭には負けたくないもの哉。ナンと一高の君さうでは御座らぬか。

△十年後の向陵思潮▽

昔と變つたのは單に運動部ばかりでない。時代の潮流は今や城壁を堅うせる向陵の內部をも貫流せんとしてゐるのだ。自治寮も過渡時代は始まらんとしてゐる。新たに入寮したる著者の知人は曰く『思つたよりはツマらん處だ』と、されど早晩ツマる樣な時代が來るものと信ず。多くとも十年後には、一高は舊主義を捨てゝ、新らしき主義のもとに、新らしき覇者となるであらう。新らしき主義とは何ぞ、運命の神の知るあるのみ。天機漏らすべからず！

早稻田大學

昔は豪傑の亂暴くらべ――今はハイカラ黨あり――蠻カラ黨あり――隱居黨あり――一伯と三博士――壯快講師――早稻田八景は何々ぞ――賄泣せの寒稽古――寄宿舍の珍世界――かくの如き人は本校に入學すべし――學校當局者への苦言

△破帽敝衣時代▽

城西、早稻田の森に、數多の木造洋館集つて、脊くらべをしてるは、これ時代の要求によつて興りたる、學界の一王國、早稻田大學である。嚴格に云へば、豐多摩郡に位してるのだが、牛込區として一般に合點されてゐる。牛込とは何から起つたか。と調べると、王朝時代に澤山牛が飼つてあつたからだと云ふ。然しながら現在では牛はその跡を止めずなりて、人間樣がウジヤウジヤして來た。最近の統計によれば、人口九萬六千餘人だとやら、是ではさしむき人込區と改稱せねばなるまい。更に調べた所に據れば、牛込區七十八ヶ町の內でも昔は一番戸數の少なかつた鶴卷町が、一千戸と云ふ數に增て、一番戸數人口の多い町となり、廿年前は二軒よりなかつた下宿屋が、今は百七十軒になつたと云ふは、早稻田大學の創設せられたるが爲めである。

由來早稻田の地は、蛙と、茗荷畑と、麥畑とを以てあらはれ、出來秋の穗波にまん丸いお月樣を賞するより外に取り柄がなかつた所ぢや。然るに伯、大隈重信、政海に意を得ず退いて地をこゝに相して同志を集め東京專門學校なるものを開校した。時に明治十六年秋十月二十五日。敎師七人に生徒九十名。學課は文一科と法科とたゞ二つ其後年々生徒の數が增加したが、老書生が多かつた。勿論當時は飮食店も、下宿屋もない。藁屋がチラホラとあつたばかりだ。アレ始業のベルが鳴る。其餘韻が畑の上を通りすぎて森の老樹の梢を動かす。と百姓屋から本を懷にねぢり込むだ書生つぽが、畦道の蛙を驚ろかしつゝかけ出る。下駄ばきに古洋服もある。尻切れ草履の破れ袴もある。深編笠に鐵扇携へ、腰に朱ざやの兩刀ぶつ込み、伊達しやねえせと役者もどきの白を使ふ男もあつた。要するに皆な水滸傳中の人物で、土性骨の据らぬ書生は一人も居らなんだ。そして集れば燒芋を澁茶で流し込むでの議論三昧、げに坪谷善四郎氏の言の如く『卒業後、一ケ月に二回洋食を食ふを樂みにして』勉强したのであつた。

△學風の革命▽

『早稻田の發展は進歩に非ずして革命なり』とさる外國大使が大隈伯に語つたとやら。眞に然り。だが、その革命の最も甚だしかつたのは大學と改稱した時であつたらう。即ち明治三十五年十月、創立二十五年を機として、早稻田大學と改稱し、卒業生に學士號を許し、商科を新設し、豫科を設け、外國大學式の角帽を制帽とし、二重橋まで提灯行列をやつた一件サ。

質素、剛健、蠻骨、などあらゆる要素を一丸とした外に、何物をも含んでゐなかつた早稻田學風は此以後、機智才氣、輕薄等の分子をも混ずるに至つたのだ。彼らの或一派の破帽は角帽に、徽衣は洋服に、草履は靴に、色あせたる古羽織はインバネスに、太い弓の折れのステッキは、しなやかな細ステッキに、

燒芋はワッフルに、澁茶はコーヒーと、それは〳〵恐ろしい變り樣――かくて下宿屋、菓子屋、ミルクホール、安洋食店、エハガキ屋など續々新築せられ、枯木の如き早稻田は一躍して花の如き世界と化した。そして輕薄なる路巷の子女をして、

『イキな早稻田の書生さん、ブックかゝへて、インキ持ち……末は博士か大臣か』なんかと歌はしむるに至つたのだ。嘘をツケ!!そんなハイカラ弱虫が博士や大臣になれるなら潮風生は河へハマつて美ン事燒け死んで御覽に入れるワイ。糞面白くない。ツまらぬ事を云ひ始めたものだ。こんな歌に乘り地になる書生も書生、作者も作者、歌ふ奴も歌ふ奴、これを稱して當世馬鹿の三幅對となす、

△横溢せる三大潮流▽

とは云ふものゝ吾輩は決して稻門ひとりハイカラなりと罵倒するのでない。ハイカラになつたのは早稻田のみに止まらず、他の學校も滔々として皆然りである。蠻骨漢を以て自任せる一高ですら、日に月にハイカラ黨に接近しつゝある世の中だ。早稻田の如きは寧ろ罪のない方かも知れぬ。

されば、本校をハイカラ學校と呼ぶは、あまりヒドい。現在早稻田の思潮は未だ統一せられざるもので、少くとも三個の別流がある。曰く、ハイカラ黨!! 曰く蠻カラ黨!! 曰く隱居黨!!

ハイカラ黨は多くは是商科、蠻カラ黨は政治科、法科に多し。隱居黨は文科、師範科であらう。尤も是はホンの大體に過ぎぬので、例外は澤山ある。現に商科でありながら蠻骨なる事吉岡將軍の如きあり。政治科にしてハイカラ[illegible]むしろ婦女に近きものあり。文科にして斗米肉百斤、ビールならば一打、醉[illegible]ては叩たく破れ机、虹の如き氣焔を吐く快男子あり。トテモ杓子定木には參ら

ぬが、マアざつと右の如き分類が適してゐやうと想ふのだ。

△一伯と三博士▽

大隈伯は在野黨の引率者として、百二十五歳説の主張者として、明治の元勳として、世界的偉人として、世は仰いでゐるが、早稲田の書生には、早稲田國の世祖として映ずるのである。文科生の如きは、伯を祖父。坪内博士を父。島村金子兩氏を兄さんと呼むでゐるさうな。然り學校と、伯とは親族の關係を有してゐる。早大の爲めには何ものをも惜まぬと公言してるもさもあるべき事だ。伯が杖を力に、蹣跚と大講堂に來り演説する時、聽衆が『ホウ成程、ウチの親父はエライ氣焔だなあ』と云ひ顔に、感心してゐるのは奇觀ぢや。伯の幕下に參して二十有五年來、ともく辛苦したのは云ふ迄もなく例の三博士である。いづれも優劣はあるまいが、第一に擧ぐべきは學長高田早苗氏だらう。二十三で學士となり、專門學校講師となつて、官學以外に一旗幟樹てた。爾來經營よろしきを得て、大學今日の隆盛あらしめた俊傑だ。逝きし紅葉山人は決して、人にゆづらぬ男であつたが、博士にだけは推服して居つたとやら、博士の得意なのは『適所に適才を置く』事で、楠殿が泣男を養つて善用した如く、ドンなお粗末な人間でも、夫れ相應の使ひ途があるとは、其の持論である。されば氏に見立てられて、適所に配置せられた適材は、數知れぬ程だと聞く。

天野博士は學説と試驗問題とが開校以來動きなきを以て鳴る。卒業生賣込みについて、盡力するのは講師中で第一。商科々長で、實業學校長を兼ぬ。

坪内博士は文壇の大立物だ『書生氣質』を出世作として、以降著はす處みな好評嘖々。その門下には秀才輩出して、所謂早稲田派を形ちづくつた。その沙汰ものゝ講義ときたら、確かに天下一品で、聲を妙に上げ下げして講ずる、ハムレットや、オセロ、さてはキング、リア、なんど、容姿眼前に髣髴する心地

して、下手な芝居や、安物の寄席なんかより、遙かに面白い。政治科商科の連中が自分の講義はソッチのけにしてやつてくるから常に滿員！シカシ流石に『懷中物御用心』とは書いてない。

△經濟史が謠曲の講義▽

本校は私立學校としては良敎師に富める事都下屈指である。慶應義塾も有名なるものだが、主に自校出身者を使つて威張つてる。早稻田では、人材を四方に求めるとの主義で、萬流を併せて、早稻田化せんと努めてゐる。本校が獨占せる講師の內、故大西祝博士、淨田和民博士、安部磯雄氏なんどは同志社の逸才だ。是に帝大出身の秀才を加へ、要所々々には、自校の才物を屯させてゐる。日本一の經濟學者と許さるゝ鹽澤昌貞氏。東京毎日の副社長、田中穗積氏。早稻田文學主筆島村抱月氏。哲學科主任、金子筑水氏なんどはその旗頭たる者。

幹事の田中唯一郎氏、副幹事の伊藤正氏、東儀鐵笛氏の如きも自校の產である。されば色眼鏡かけたる、小心の文部省が、視て以て學界の一大王國となし、折もあらば壓迫を加へんとせるも宜なるかな哉だ。

けれども本校の方では案外無頓着である。特に政治家なんかと來たら、卒業後お役人にも何にもなる氣はない（寧ろならうとしてもなれない）から、磊々落々、ノンキな日を送つゝある。講師も壯快な學者がゐる。かつて珍快講座三幅對として擧げられたのは、和田垣博士、志賀學士、長田秋濤氏で、和田謙博士が一番目茶々々な時間であつた。本職の經濟史はソッチのけで、演說をする。歌ふ。吟ずる。弓術の眞似をする。鼻息の凄まじさに、火鉢は灰神樂をあげる。イヤハヤ大變な騷ぎだ。と思へば或時は又、圓十郎の葬式の話をシミ〴〵と二時間もやつた。學生もたまへかねて、經濟史には沒交涉でありませんかと一本の釘を打込めば、馬鹿を云へ、是が立派なエコノミカル、ヒストリー也。諸君が習は

うと望むのは死んだ學問だ。死んだ學問は地獄で教授するヨ。なんかと澄ましてる。試驗には『アダム、スミズにつきて』と、平生ロクに教へもせぬ題を出す。ヘウキンなる一生。たゞ俚歌を書いた。曰く

味噌も酢味噌（スミス）も、わしや白葱の、
口の香りが恥かしい。

と、粋な博士直ちに九十點を與へた由。

志賀重昂學士は演說講義で、少壯時代に南洋航海をやつた事を再三物語る。小さい象の様な小さい眼、大きな顏。太い腕、われ鐘に似たる蠻聲。無邪氣な戲談。要するに學課の心地がせぬ。

今は既に去つてあらざれ共、長田秋濤氏は、カンジンの佛語は一時間に五分か十分で切りあげ、殘餘は宇宙併呑的快談であつたが其他、準壯快講師は、一雲の如く林の如く多い。豪傑肌の巽來次郎氏。質素儉約なる副島學士。特にその世界漫遊より歸り來るや、洋傘一本と、ツランク一個とを提げて『今、戻つたよ』とばかり、中村進午博士宅へ飛び込み、其狀、あだかも隣村からきた様な調子であつたのは、同人間の逸話となつてゐる。それから、いつでもビールの二本も平げた様に、ドロリとなつて御機嫌よく、試驗の時なんか、この邊が出さうぢやと豫報する吉田巳之助氏。有名な菊池三溪氏の息子で、ヒヨロ々々オツな警句を吐く菊池二九郎氏など、一々擧げた日には際限があるまい。

△師弟間の交情▽

三尺去つて師の影を踏まずとはズット昔の唐人の寢言で現在の學生は大抵其んな觀念は毛頭もなし。講師は藝が身を助ける學問の切り賣りをして妻子を養ふのだ。學生は字引を引くのが面倒だから、生きた字引なる教師を使用するの

だ。師弟も糸瓜もあるもんか、五分々々の權利だよ、ポン々々云ひなはんなと言はぬばかり。然るに感心な事には早稻田の學生は割合に師匠を尊敬する樣である。元勳三博士は申す迄もない其他浮田、有賀、島村、金子、鹽澤なんど云ふ連中の事は影で話す時でも『サン』附けにする。眞に尊敬してるからであらう。そして又其交情も厚いもので、級友會などへは講師は喜こんで出席し、俱に食ひ、倘に樂み、我子弟の如く語つてゐるこれは確にお役所主義の官學に見る事が出來まいテ。

△健兒肉躍る!!▽

長い〳〵暑中休暇が終つて、新涼の氣がいつくともなく動き初むる九月上旬よりして。早稻田は活動の域に入るのである。帝國大學の全盛期は其の校庭の櫻、美々しく咲き亂るゝ時にあるのだが、早稻田の得意時代は隈伯邸の菊が狂ひ出さうとする頃なのぢや。滅じたりと云へども尙は面目を存する稻田に、稻は黃金の浪をうつ。正に是、天高く馬肥え、健兒肉躍るの時である!!

新入生は例の早稻田式の菱帽かぶつて。魂の拔けたる如く、ふらり〳〵あるいてゐる。そりや野球仕合があると見にゆき、其の盛大に魂を消し、教場に出ては講師の千篇一律の古講義を聽いて馬鹿に感服し、キヨト〳〵オロ〳〵氣の毒な程である。

上級生の方――即ち古參株にとつては秋が一番のんきな時期だ。試驗には約一年あると云ふので、遊べ〳〵と大陽氣、大抵の學課は失敬して仕舞つてベースボールを彌次りに行く。ボートを漕ぐ。遠足をやる。ラッケットを振ふ。青春の血汐燃ゆる彼らは如何にして面白く遊ぶべきかと云ふ事のみに苦心してゐるのだ。體重をはかれば試驗前よりは確に一貫や二貫は違ふであらうよ。

十月の二十五日は學校の設立紀念日で休日、これを過ぎるとソロ〳〵寒くな

る。蛇や蛙は冬籠りだが、學生はそうはゆかぬ。洟をたらしながらもテク〳〵通學する。と、スグお正月が來る。歸省をして弟妹の顏を見んとする者や、病氣だと僞つて金を取り寄せ、コソ〳〵旅行に出かける不屆者や、『戀に朽ちなん名こそ惜しけれ。』と朝から晩まで歌がるたをやるハイカラや、寄宿舍に居殘つて、暗に冷飯を食はされ、『正月はツマらんなあ』とコボす貧書生や、見來れば好個の百面相。實におもしろいものだ。

世は大寒に入つて益々寒く、學校では靴の先がチク〳〵痛い位で、老講師が後生大事に睪丸火鉢を抱えだす頃になると柔道寒稽古がある。

凄じかつた餘寒去り、梅笑ひ、桃咲き、櫻開き、菜種に蝶のたはむれるやうになると、學生は再び活動期に入る——否な、活動に非ず、花に浮れて騷ぎ出すのだ。運動會だと云つて十日休む。何だの蚊だの口實をつけて其上七日も休む。確かに正氣でない。されば、花散つて、上野、江戸川、向島の樹々が靑葉に埋れる四月の末になるとさしもの健兒先生も靑くなる——蓋し大敵なる進級試驗が襲つて來るからなのだ。

圖書館は急に入館人員が殖える。モウ雜誌や小說は借り人がない。講義も聽衆、堂に溢るゝ盛況で、勉强家のノートブックは、不勉强者の手から手へ、借せ、借せ、と羽があるやうに飛んであるく。寄宿舍が終夜燈になる。徹夜する男が多くなると同時に敎場で、居ねむりをする學生も多くなる。早稻田學堂の學生が眞劍の勉强をするのは、四月末から六月末迄だ。誰かゞ此調子で年中努めたなれば後世恐るべしだと批評した。成程さうであらうが、そこは凡夫の淺ましさ、生れ更つて神樣にでもならねばトテモ駄目だ。

〳〵くの字なりに曲りながらも試驗がすめば一と安心。更らにビリでもかまはぬ及第さへしてゐれば、大願成就。あとは爲替をタンマリ取り寄せて、戀しい故鄕へ歸るばかり。久し振りで湯に入り、親友とビールでも引かけて、『來學期から

ら獰猛に勉強して特待生にならうぜ。』なんかんと氣焰を吐く、障子あけ放した西の窓からは、涼しい夏のお月樣が、『嘘をつけ！』と云はぬばかりな顏？をして覗き込むでゐる!!!

△早稻田の八名物▽

近江に八景あり。越後に七不思議あり。而して早稻田には八名物がある。曰く大隈老伯の銅像、曰く圖書館の美少年司書係。曰く八百の清國留學生。曰く大瀧の水車。曰く駒塚橋の落日。曰くミルクホールの繁昌。曰く鶴卷町の泥濘。曰く、運動場の月夜。即ち是である。

中でも有名なのが大瀧の水車と駒塚橋の落日で、早稻田文士がこれによつて若干のヒントを得て以て小說の材料としたかはわからぬ程である。駒塚橋の邊は古跡に富んだ所で、近き田中宮內大臣邸には有名な芭蕉庵あり。上流二町の地に光る源氏の君、業平卿が『おもかげ橋』があるし、武士中の武士たる太田道灌が少女に囘まされたる山吹の里、忠臣藏の大建物、堀部安兵衞金丸が叔父の仇を討ち取つた高田の馬場なんど、みなこのあたり方數町の內にあつて、早稻田健兒の訪ふを待つてゐる。

運動場は二萬餘坪と號せども眞赤な嘘で御座る。何で是が二萬坪もあつてたまるものか、但し、東京の諸學校のもの丶內で上の部に位する事は確かな事實だ。一面は岡を負ひ、一方は人家、東は田圃、北は畑を見越して遙かに目白女子大學の粉壁を望む。世上の間拔け共は是れだから『早稻田よいとこ目白み受て魔風戀風そよ〳〵と』の謠が出たのだといふが、言語道斷、これは萬朝報の俚謠正調に當選して一圓が欲しさに暇人が假りに想像して作つたものだ。嘘と思はゞ來て見られよ。月明かに、風清き晩など、早稻田の學生がこゝへ來てドナルもの〻『胸中の奇計、誰に向つてか語らん』底の吟詩に非ずんば、凄絕悲

絕、常陸丸や石童丸の如き薩摩琵琶である!!

ミルクホールの多い事は是亦た有名なものでワツフル結構シユークリーム好物と、飛ぶが如くに賣れて、父兄が汗水流して得た金は見る〳〵内に不肖なる子弟の腹中に葬られる。多いと云へば會合の多い事も名物に入るかも知らぬ。學校の學生通用門をくゞるものはいつでも必ず幾十枚かのビラが張られてある。を見るであらう。有名なる文藝協會などは卒業生の團體だが、ほかは學生の團體で曰く何々鄕友會、何組級友會、何縣懇親會、何君送別會、何氏追悼會など一々あげれば際限がない程である。

語會、小波氏會長たる繪畫研究會、青柳學士會頭の日清協會、浮田和民氏を戴ける社會學研究會、田中穗積氏主唱の新聞研究會、その他に佛語學會、獨逸學會、カルタ會、俳句會、甚だしきに至つては新體詩朗吟會まであると云ふ始末。もし片ツ端から出席しようものなら毎日會の爲めに忙殺されるのみか、會費のお蔭で身代限りをするだらうとの評判だ。何にしても結構な事だが、これらの團隊の中には齒の浮くやうな浮薄千萬のものもないではない。學生にあるまじき迄のハイカラな身なりで、シヤナラ、クナリ、お姫樣の腐つた樣な變性男子もゐる。よせばよいのに應答の言語を『そうして?』とか『そうよ』とか女の通りにして得々たる阿呆もゐる。要するに眞面目な研究會の類の外のものには、こんなのが多い。シカシ其の中には徹頭徹尾ゴリ〳〵の蠻カラ團體なきにしもあらず。

△蠻骨團體のかず〳〵▽

蠻骨團體の第一は雄辯會だ、舌は廿世紀の最大武器で御座るとの宣言のもとに起つたる一と組だ。會費はいらぬ。毎金曜の例會毎に身體一つを持參すればよいのだ。否な。それも邪魔ならば出すに及ばぬ。何となれば去る者は逐はざ

る主義なのだから……。

會は夕刻の六時から始まる。飛入り勝手、彌次勝手、從つて少しでもヘマな辯士あらば座にだも堪えぬ嘲罵の言を浴びせかけるからほうほう引き下つて仕舞ふ。早稻田雄辯會の彌次り法は天下無雙なるを以て鳴れり。ほや〳〵の新入生などは眼玉をくり〳〵まはして驚く。されど、艱難は人を璧とすとやら、この通り彌次らるゝお蔭で以て一年も出席した者は膽が坐つて如何なる事にもアガらぬやうになるのだ。故に此の嘲罵こそ早稻田が辯論界に重きをなしてゐる源泉なのである。

第二は柔道擊劍部で、其の特色は所謂寒稽古は遺憾なく發揚せられてゐる。寒稽古は最も寒き三十日を午前四時より七時迄道場に催されるので、寄宿舍が中心だ。『オイ〇〇、起きろ〳〵』と云ふ調子で、還家の夢から呼び醒される。『應。』と答へて床を脫け出で、氷りついた水を暖めて、どうやらこうやら手水をつかひ、竹刀や稽古着やを携へて外に出づれば、身を切やうな風がピウ〳〵。寒月、西天に傾きながらも冴えて晝の如く、路は霜柱の立たぬ所は凍ついて石のやう。下駄カラコロと鳴る。兩側の民家は戸を閉して温かい夢の最中だ。今頃起きてるは巡査君と泥棒君だけだらう。イヤそれも寢てるかも知れぬと思ひながら、ふるへ〳〵、大隈伯邸の塀について曲り、蠶々と空を摩する銀杏の落葉したる梢より星影が洩れてすごい邊も通つて道場に近づけば、ドーン、バタ々々。カチ々々。カチリ。と遠波の如き響が聞える!!! モウ寒い事も忘れて走り込む。裸になつて道具をつけ一本、二本、三本とやるに從つて暖かくなる。東天、紅を帶び、やがて朝日の昇る頃には、先刻刺疊の塵を吸つてゐた健男兒は賄の汁をすゝりつゝある。腹はへつたり。めしはうまし、五杯や六杯は平氣の平ちやんじや。されば賄方の恐惶一方ならず寒稽古の事を一名賄泣かせと呼むでるさうだ。

早稻田大學

る主義なのだから……。

會は夕刻の六時から始まる。飛入り勝手、彌次勝手、從つて少しでもヘマな辯士あらば座にだも堪えぬ嘲罵の言を浴びせかけるからほうほう引き下つて仕舞ふ。早稻田雄辯會の彌次り法は天下無雙なるを以て鳴れり。ほや〳〵の新入生などは眼玉をくり〳〵まはして驚く。されど、艱難は人を璧とすとやら、この通り彌次らるゝお蔭で以て一年も出席した者は膽が坐つて如何なる事にもアガらぬやうになるのだ。故に此の嘲罵こそ早稻田が辯論界に重きをなしてゐる源泉なのである。

第二は柔道擊劍部で、其の特色は所謂寒稽古は遺憾なく發揚せられてゐる。寒稽古は最も寒き三十日を午前四時より七時迄道場に催されるので、寄宿舍が中心だ。『オイ〇〇、起きろ〳〵』と云ふ調子で、還家の夢から呼び醒される。『應。』と答へて床を脫け出で、氷りついた水を暖めて、どうやらこうやら手水をつかひ、竹刀や稽古着やを携へて外に出づれば、身を切やうな風がピウ〳〵。寒月、西天に傾きながらも冴えて晝の如く、路は霜柱の立たぬ所は凍ついて石のやう。下駄、カラコロと鳴る。兩側の民家は戸を閉して溫かい夢の最中だ。今頃起きてるは巡査君と泥棒君だけだらう。イヤそれも寢てるかも知れぬと思ひながら、ふるへ〳〵、大隈伯邸の塀について曲り、矗々と空を摩する銀杏の落葉したる梢より星影が洩れてすごい邊も通つて道場に近づけば、ドーン、バタ々々。カチ々々。カチリ。と遠波の如き響が聞える!!! モウ寒い事も忘れて走り込む。裸になつて道具をつけ一本、二本、三本とやるに從つて暖かくなる。東天、紅を帶び、やがて朝日の昇る頃には、先刻刺疊の塵を吸つてゐた健男兒は賄の汁をすゝりつゝある。腹はへつたり。めしはうまし、五杯や六杯は平氣の平ちやんじや。されば賄方の恐惶一方ならず寒稽古の事を一名賄泣かせと呼むでるさうだ。

早稻田大學

蠻骨團體の第三は、野球部、庭球部、短艇部等である、が、是は少數の人のとである上に、其の消息は世人の知る所だから、ワザと省略して置く。第四には、例の、虎髯將軍吉岡信敬閣下を總裁とせる、早稻田彌次團なれど、是亦世人の知悉する所なれば、こゝにはたゞ近來大改革を斷行し、三浦以下二人の彌次親王を指揮官に任命した事だけ述べて多く云はぬ。第五には高田學長が早稻田學風の心臟なりと語りし事のある。

△珍世界的寄宿舍▽

の今昔を述べやう。

云ふ迄もなく寄宿舍は人材の搖籃である。眼から鼻へ拔けるやうな機敏な。そして學力はと問へば優秀な、廿世紀的活動の人物を造り出すのが目的だ。もし是が出來ぬやうなら、澤山な金を出して大きな家を建て、社會經濟の上から見ればまだ價値のゼロなる青書生共を收容する必要がない。然るに各校競つて寄宿を造るは秀才を出し得るからであらう。回顧すれば舊專門學校の寄宿舍からも、島村抱月、金子馬治、中島半次郎、田川大吉郎、宮川鐵次郎、鹽澤昌貞、圓城寺清などの諸氏——高田學長の所謂『寄宿舍メ！ドマン』が輩出した。されば今後もかゝる人々を出したいとて設けられたのだ。

現在の寄宿生は第一第二寄宿舍を合して約二百であるが、大抵豪傑連が集つてゐる。

古い出身者の談によれば昔は隨分亂暴したもので、冬、寒いからと云つて格子戸をヘシ折つて焚き、折り焚く格子日記なるものを書いた。又、賄征伐が激烈にすぎて食堂を完膚なく破壞してめしが食へず、數十人隊を組み當時の校長鳩山博士の宅になだれ込むで、流石の春子夫人も面喰ひ、眼をパチクリさしたと云ふ話や、或は五月六月の試驗勉強の頃には早稻田名物の蛙が八ケ間敷鳴

くので妨害になるとて、小石を拾つて置き、時々投げては之を鎮めた迄はよかつたが、一日百姓の額にブチあてゝ怒鳴り込まれて大喧嘩をやつた事もあるとか。されば舍長はいつも泣ッ面で終には堪え兼ねて湯玉のやうな熱涙を噬して『人生舍長の身となる勿れ』と嘆じたものだ。今はマサカにそんな事はないが、しかし蠻カラさは依然たりだ。故に小膽にして臆病なる一部のハイカラ弱蟲は寄宿を目して彌次の本場、又は珍世界と云つてゐる。珍世界の意味は盖し『不具にして日本一なるものゝ集り』なる謎なり。成程考へて見れば御尤も。ハイカラ先生の眼には彌次とも不具とも見えるかも知らぬテ。諸君御存じの頑鐵橋戸信君や、野球大選手田部君やは此の寄宿の造れる人であつた。而して現に氏家、三井、岸、勝又、井上、直江等の庭球選手諸君がゐる。蠻骨漢には政治科三年の首席なる江尻恭平あり。彼や東北饑饉地の産、ゴルキー崇拜、簡易生活の張本人で、居室には噴煙たちのぼる三原山の繪を懸け、人生の意氣――男子の意氣はカウでなくてはならぬと法螺を吹いてゐる。それから禪宗熱常に枯木寒巖を學ぶ大浦正三君あり。鐵鞭なる筆寫雜誌を主幹して議論風の天才？淡浪逸郎君あり。要するに痛快、又壯快、確かに此の中から一人の、エライ人が出さうに思はれるのである。全舍生憧憬の中心となつてゐる事云ふ迄もなく高田學長で、其の肖像を油繪とする議があるそうだ。寄宿生費用は賄料は六圓五十錢、舍費が二圓以上、それに授業料、小使錢を合せて十五圓位なものである。是で人才が出れば安いものと云はんければならぬ。

△かくの如き人は本校に入學すべし▽

さらば、早稻田は如何なる類の學校なりや。一言に掩へば、徹頭徹尾在野的の學校だ。政治科の如き、兩院へ二三十名の代議士を出し、知事や事務官も輩出してるが、かゝる例外はさておき、一體に政府の事業では左程成功して居

らぬ。法科でも判檢事辯護士にも得意の腕を振へるもの少なし。商科にしても當分は日本銀行や何んかに向かぬ。すべて官吏側では成功の見込は、帝大、高商の出身者に及ばぬは當然だ。其代り、新聞雜誌業には日本第一の大便宜を有し、他校が勢力を張らぬ間に、この方面に發展したものだから、有力な先輩が、陣笠連に至つては、天の川の星の數より多い位。北は雪深き樺太の涯より、南、生蕃躍る臺灣の端に至るまで、新聞と云ふ新聞、雜誌といふ雜誌には、くとも一兩名は早稻田出身者がゐる盛況。操觚者たらんには、本校に敵する修養所はない。

次に多きは文士である。帝大の文科大學は、昔こそ、エラキ人を出し得たれ。今は、早稻田に及ばぬ？小說家志望者に唯一無二の研究所だ。

それから又た、家鄉に相應の財產があつて、卒業後は若主人として理想境を田園に樂まんと計る人にも、よき學校である。善良なる民を作るのは、他校に勝る。

第四には官學を喜ばぬ人である。本校の主義は學問の獨立で、束縛を受けず學びたしとならば、まづ上等の學校だ。

第五には資金、體力、學力の都合上、官學に入り得ぬ人である。云ふ迄もなく人生は永い！〳〵競爭である。長日月の間には、後の烏が前になるもの、中學卒業後の數年は、一たび屈するも可。終局の勝利を締める氣で居れば、何も帝國大學に入らねば首をク、ルと云ふ迄もなからう。根が私學校なれば、官學に比して大いに融通のキク點あれば、便利なるべし。年限も短かく、苦學の時間もある。尤もアマリ內職に身を入れて、本務たる學問が出來んでも困るが、先づやり樣により一ケ月五圓は學課に妨げなく儲けられる（坪內博士の說）夫れ以上は其人々々の腕にある事で、例をあげて示すわけには行かぬ。たゞ、大節約すれば、一ケ月十三圓位でも支へられるは受合だ。普通は十五圓から二十圓

がとまりだ。

何にしろ、苦學生で高等教育を受ける時代はモウ過ぎた様に思はれる。

早稲田へ入つて失望せぬ人は、右五ッの場合の人々だらう。但、注意を學校當局者に乞ひたい事は、校運隆盛に赴き、膨脹發展すると共に、宿昔の宣言を忘れて、徒らに官學に摸せんとする傾向の生じてきた件である。著者は天下學界のため、はた本校のため、深く憂ふ。早稲田は飽く迄早稲田の特徴を發揮すべき也。然ずば虎を描いて猫に類する譏を殘さむ。おん愼み候へと申す。

慶應義塾大學

理想的平民福澤諭吉翁――實業界へ如何に人材を供給せしか――かげがへのなき重役――船頭多くして、船山へ昇る――花の雫の幼稚舍生――ハイカラなのは普通部――大學部は理財科萬能――食道樂も官學に拮抗す――商略の成功――家族的などゝは青年の言にあらず――何でもかまはぬ野獸の如く運動せよ。――秘密結社の鐵拳制裁は賛成だ。

△平民の親玉福澤諭吉翁▽

近頃はゴタ〳〵と私立大學が頭をもたげたが、眞に大學と稱しても恥しからぬ設備と實力あるは、慶應と早稲田だけであらう。この二者は、丁度英國の劍橋、牛津、米國のエール、ハーバード兩大學の對立せる如く、お互に拮抗しあつてゐるのである。だから早稲田の相手には慶應が引き出され、慶應の話の序には、早稲田が論及されるのである。

先づ第一に槍玉にあがるのは雙方の創立者だ。早稲田は老雄、大隈伯。三は大教育家、福澤諭吉翁。中々回向院や何かでは見られぬ好取組ぢや。

昨年の暮であつたと記憶する。早稲田學報紙上に於て、三宅雪嶺博士は隈を『大平民』だと論述せられた。けれども私かに不服である。考へても御覽、は華族でないか。武士道崇拜者でないか。何かの二タ口目には『吾輩は武士

ある』と叫ぶではないか。伯、政權に遠ざかる事、こゝに年ありと云へども、早稻田の一角より怠らず天下の風雲を覗つてゐる。百二十五歳まで生きる間には、モウ五六度は大宰相の椅子にも坐る意氣込の人だ。大武士とこそ云はゞ云へ、大平民とはチト受取りがたい。管見を以てすれば、福澤諭吉翁こそ大平民たる稱號を冠らして然るべき人物だと想ふ。

福澤翁は奥平藩の小士族。シカシ、武士や、帶刀や、空威張りは大の嫌ひでかつて殿樣から、武士の最名譽なりとする御紋服を拜領したが、ンなものは少しも喜ばず、早速一兩三分に賣り飛ばして酒を飲んだ事もあつた。刀を佩す事を忌んで『文明開國の世の中に難有さうに兇器を腰にしてゐる奴は馬鹿だ。其の刀の長いほど大馬鹿であるから、武家の刀は之を名づけて馬鹿メートルと云ふがよからう』と痛罵した事もある。晩年には華族の御沙汰あつてさへも辭した。要するに民黨の親玉理想の大平民なのだ。

平民は貴族の樣に威張らない。福翁其最たる人である。此頃は文學界に自然主義なる一派が流行して、現實を暴露すべしとか、現世の在りのまを寫せとか八ケ間敷いが、翁は或る意味に於て自然派であつたのだ。婦人を破天荒に罵倒したのは人の已に知る所、つねに洒々落々として藝者の話で郎の話でも、ドシ〳〵やり、酒も煙草も用ひた亂暴は、普通道學先生達は腰を拔かす所である。シカシ同時に翁は又心地のよい程壯快の人物であつて——左樣、獨立自尊と申すのであらう——神樣のお札で尻をふいたり、稻荷樣の御神體をおつぽり出して、石コロを入れたりするやうな、前人未曾有の亂暴もやつつけた。夏は眞つ裸の上に絽の羽織を引つかけて輪講し、冬は虱だらけの着物を霜夜の物干に出して、半風子の親も玉子も凍死せしめて快哉を連呼した。夜店では喧嘩をする。長じて塾をおこせば、天下に率先して授業料制度を發明し、敎師だとて人間ならば、食はねばならぬ、食ふには金がいる。諸君、毎月二分

づゝ出し給へと命じた。其のヤリ口の痛快千萬なる古今獨歩ぢや。大町桂月氏は評して、『翁はダヾッ廣い野ッ原の樣だ、どこと云つて別に取り所もないが、たゞ心地がよい。其代り、折々は下肥の臭ひがする事もある。』と云ふ意味に道つたのは至言だと思ふ。

煎じ詰むれば翁はあくまでも町人的である。商賣人的である。而してその言行が源となつて三田學風は作られたのである。

△かけがへなき重役▽

我が國の私學校中で、最も多く人材を供給したのは本校に敵するものはあるまい。その盛んなるや帝大をもしのいだ位だ。現時の議會にも、三十人近き貴族院議員と、二十數人の衆議院議員とを出してゐる。なほ疑ふ者あらば、試みに塾友姓名錄を繰つて見給へ、驚ろくべき多數の名士あるを知らむ。是は去る年同校に五十年祭のあつた時の話であるが、某大學の某博士も列席し、歸校の後、その創立者に『裝飾なんかは驚きませぬが、たゞ、接待係りに塾出の、大實業家を使つてるだけは、只今の本校では一寸眞似が出來ません。』云々と語つたのを以て證明せらるゝ。

特に、潮風生の敬服するのは、それらの大實業家が、かけがへのなき人物なる一事だ。かの帝大出身者の如き、ズイブン高位高官に昇つてる者もある。其人自身に考へれば、立派な成功者だらうが、一般の眼から見ると、運よくてよい椅子を占め、盲印を捺してるとしきや思はれぬ。大臣樣も局長樣も何もあるものか、元來がアマリ實力がないのだから、死んだとて、その人以上のお代りは澤山、後に控えてる。

處が塾の先輩を見給へ。成程その位置は、營利を目的とせる私設會社の重役たるに過ぎぬか知らぬが、その人に俄かに死なれては、適當な後任に困ると云

ふ風な、逸才は一々擧げるに忙はしい程だ。どこやらの誰やらの言ふ樣に、『成功とは、かけがへのなき人傑になるにあり』と、それが眞理であれば、實際の成功者は、三田に多いと申さんければならぬ。

然しながら悲しい哉其事まさに過去の夢とならんとしてゐる。

云ふてもかへらぬ事ながら、げに逝きし福翁は一世の雄であつた。上野戰爭の砲聲を耳にしつゝ、平然ウエーランドの經濟を講じて騷がなんだ逸事。及び翁が撰擇せし米國のリーダーが、日本學生の教科書として今日尚ほ行はるゝ、其識見。一時は帝國大學總長まで塾出身者であつた其の勢力など、一々擧げ來らば限りがない。

翁は名實共に三田の礎である。其翁が忽然此の世を去つたさへあるに若干もなく、高弟小幡氏また沒したのだ。是れ豈に三田派の大打撃と云はずにおかれようか。成程、福翁の二遺子や、鎌田塾長や、更に下つて塾の直參、青木、氣賀、神戸その他の人々はエラからう。個人として觀察すれば、いづれも申分なき好紳士、好學者、好策士であらうが、福翁の如き辛辣なる手腕なき事明である。福翁の手腕なくんばどうしても三千五百の腕白は制し切れぬ。愚、按ずるに三田の今日は猶ほ太陽の沒後に喩ふべきか。群星にも似たる俊秀爛々として輝く。華やかにして賑かなれども煎ずる所ドングリの脊くらべなり、『船頭が多くて船が山へ登る』の諺の適合するを思はざる能はず。

吾輩は信ずる。一時は帝大をも凌ぎし三田が、今日やゝもすれば後進早稻田にすら追ひ拔かれんとしつゝあるは、一に過去の光榮ある歷史に醉ひ、是に執着しているからだと。これぞ慶應を害ふ唯一の敵である。一體、人間は過去の自慢ばかりするやうになつてはモウお仕舞ぢや。男子はつねに前面のみを見なければならぬ。遠大なる希望に向つて馬車馬的に突進すべきである。世には歷史家なるものあり。社會日々の出來事を記錄する事と、白い米の飯を黃ろい糞

として排泄する事とを以て終生の能事となしてゐる。諸君が記憶して置かずとも、其の事にして眞に傳ふる價値あらば、歴史家が書き止めてくれるから、安心して向上を計るべし。これ些々たる末事に似て實は大事なり。三田の健兒君、先づ卿等が歴史を捨てよ。卿等の信用を捨てよ。而して、裸一貫で一と身代おこす氣で氣張りたまへ。然らずんば榮譽は單に過去の思ひ出にのみ殘るばかりになるであらう！

△可愛き幼稚舍生▽

晝間三田のあたりをウロつく人あらば、必ず、慶應の制帽を戴き、七ツ金釦のジャケツ凛々しく着こなした、半ズボン姿可愛き少年の群れを見るであらう。是れが慶應幼稚舍の生徒である。

幼稚舍は、明治七年和田義郎氏の主唱創立にかゝる。かの九鬼子爵、原金港堂主、江澤天賞堂主、毛利男爵、平沼亮三、土屋海軍大佐、立法學博士など、みな一度はこの校門をくぐつた腕白坊主だつたとは趣味がある。年限は六年即ち改正小學校令に同じ。人員は二百七十人。特徴は寄宿舍のある一件だ。

當今、小學校で寄宿舍のあるは、有名な高千穗小學校と、曉星小學と本舍あるのみ。何がさて、小人島の住民の樣な小倅？の集合だから愉快な事夥だし。角力取るやら、躍るやら、兵隊ごつこやら。あれ樹に昇る。それ石を投げる。飛ぶ。はねる。と大騒ぎ。洋服を常服としてるので運動が頗る活潑だ。舍生は九十名で保姆と云つて監督する女が一名。家族的に愉快に暮さすものぢやから、入舍當時はガラにないホームシックなどおこした者も、いつやら知らぬ間に遊び仲間に入つて仕舞ふ。福翁は『先づ獸身を養ひ、然る後人心を養へ』と腕白奨勵、授業輕減を主張されたので、今は一斑の同年兒童より健康だとの事。

幼稚舍名物は土曜日毎の談話會である。福翁の遺影ある廣間で、七つ八つ

子供が演說する。テーブルが先生用であるから、辯士の顏の上半だけ位より見へぬ。『みなさん、私は、おちいさんと、おばさんのお話をします』なんかとやる。材料は大抵、漣の叔父さんのを拜借する由。

次は、野球仕合の應援だ。特に早慶大仕合の時の如き、一同武器庫の一角に陣どり、紫の小旗を振つて聲援す。いづれも可愛き稚子櫻、蕾の花の少年たちが、幼ない聲を振りしぼつて、『フレー、フレー、ケーオー』を三唱する調子のいかに趣き深くある事よ。バツト握つて場に立つ選手の耳には天來の美音樂と聞えて、勇氣日頃に百倍するであらう。一高早稻田等の彌次を炎天の荒野に吼ゆる猛獅に比すれば、これは、陽春四月、菜の花に舞ふ蝴蝶に喩へつべし。何にしても愛くるしいものだテ。

彼らは何幾程の生活費を要するかと尋ぬるに、舍費、授業料其他小使など、すべて加へて、一ケ月少くも十七圓以上なければならぬさうである。

一少年が十七圓の學費！

一高や高工の蠻骨學生は、乃生より多いと驚倒するであらう。然り、十七圓以上はチト高い。だが、彼等はこゝの兄貴分の普通部——即ち中學程度——の學生に至つては一ケ月二十五圓以上も珍らしくないのである。故に余は二者を

△平民學習院！▽

なりと呼ばむとす。諸君も御存じの通り學習院は名門、華族の子弟の學ぶ所である。是が昔ならば、黃金作りの細き太刀佩いて、紅梅のもとに歌でもよむ位が關の山の人達なり。卑俗なるコチヤエー節にも

『お江戸學習院は稚子の山、櫻花、帽子の徽章に增す姿。コチヤ、情も誠も嵐山、アチヤエー、コチヤエー』

とあるを見ても一斑を窺ふべし。名家の事とて金錢にコセつかぬから容貌ノ

、、ツペリとして美、玉の如く、紅顔の美少年多きを以て天下に鳴る。慶應の普通部及び幼稚舍の如き、やゝ、是に類す。大抵良家の子弟だ。父兄は男爵、子爵等の肩書こそないが、大會社の重役か、大實業家で、ヘロ〳〵華族や貧乏公卿共の遠く足もとにだも寄りつけぬ大資產家もある。されば身のまはり、飮食物に至るまで、都下かいなでの小中學生と選を異にしてゐる。ソコデ先にも述べた如く二十五圓以上も使ふ生徒があるのだ。又た說をなすものあり。それだから神明藝者はお茶を挽かずともよいのだと主張するが、此の評はあまり穿ちすぎて可哀さうである。（尤も多數の中には靑二歲のくせに猫遊びもやる愚劣漢もあらうが、全體の上に於ては品行は方正の部類に屬す。）

吾輩はかつて幼稚舍の森常樹氏に會した節、同舍及び普通部の學生は良家の子弟が多からうと問ふた。氏は『イヤさうでもありませんと。一言のもとに否定して仕舞つた。勿論西洋などでも、『富者の大學』と稱せらるゝものゝ內にも左程でないとの事實もあるから。氏の言夫れ或はホントウであらう。けれども慶應の學生――シカモ年少なる――が、ハイカラなるは天下の公論だ。ハイカラも良い。吾人は決して田舍の頑固爺さんが息子の小使錢を取締るやうに、コセ〳〵するを好まぬ。その問題は後まはしとして、たゞこゝに一つ輕々に看過すべからざる一大缺點あり。そは何ぞ。

曰く學力不充分！

或る信すべき筋の情報に據れば、普通部の某敎師は其の學生の算術の力が、他の中學に劣れる事を白狀したと云ふ。イヤ單に算術ばかりでない。あらゆる學課が思はしからずとソツと語つたのであるとか。人或は是風說なりと打ち消すかも知れぬ。然り、風說であつてほしい。學習院に似たりとは云ひながらも、卿等は未來の新日本を形作る一分子である。どうか、此の事實をして單に一片の風說として終らしめよ。卿等の任は大也、吳々も華族の若樣――國音『馬鹿

樣』に通ず――の眞似をなす事勿れ！

△食道樂も官學と競爭▽

坪内博士はかつて。『人生は智慾、色慾及び食慾の三慾あり』と云つた。シカシ其の内で無邪氣なる青年を襲ふものは食慾だテ。世人はやゝもすれば當今の學生は墮落せり、助平なりと罵倒するが、不當である。勿論數多い事故、變者殺しの早稻田大學生、情死せる高等學校生、駈落せる慶應義塾生、婦人用便所でコソついたる法科大學生など、新聞の三面に頻々として現はれる。けれども一斑の傾向は色慾にあらずして食慾なり。昨冬小石川區茗荷谷の東洋協會學校（舊稱臺灣協會）の寄宿舍を參觀した末、同舍内規なるものを見るに、

『一、食事時間を嚴守し、時間前に窓より飛び込む等の擧動あるべからず』

と明記されて居たので、思はず吹き出した。シカシよく考へれば、此の事、必ずしも笑ふべきでない。由來大食は書生と居候の特徴だ。諸君知らずや、帝國最高の學府で候ふと誇稱せる赤門前の二分の一は飲食店である事を。又た駒場大學實習の歌には『おれの時計は腹時計、いつでも〳〵十二時だ』云々とあるが、眞に然り、書生と云ふものは芝居の千松同樣、つねに何か食たがつてゐるのである！

三田通り――即ち塾の正門の近所に今福なる料理店がある。塾の學生を弗箱として生活す。此の家にABCと三種の辨當あり。Aは洋食一品にめしをつけて十六錢、Bは洋食を二品として二十三錢、Cは洋食三品にて三十錢の由。藏前の高等工業唯一の美味、ライスカレー丼なる珍怪洋食一個七錢なると比較すれば、ハイカラさ加減、一目にして瞭然たりではないか。

慶應は帝國大學に對抗する意氣ださうなが、單に學術のみにあらずして、食

ふ方にしても官學に遜色なきを期してゐると見へるテ。

然り、三田健兒は確に食道樂である。ワッフルの綴りも知らぬ前に先づ其の味を知り、敎室へ入るよりも、今福又は木村屋の如き飮食店の戸を潛るを好む。而して其の甚だしきは大學部よりも寧ろ普通部にあるとは豫想外でないか。細密の調査によれば、今福事、東洋軒へは毎日五十人、木村屋、外二軒へは百人强、其他ゴチヤ〳〵散在せるミルクホールに入る人員は數知れぬ程だ。即ち、ザッと三百人と見つもり、六割を普通部とすれば百八十人だ。普通部の總員八百餘人より寄宿生二百餘人を減じたるものは六百人あまりだ。シテ見れば普通部の三分一は毎日二十錢內外な晝食料を拂ふ譯だ。

△理財科萬能の大學部▽

幼稚舍、普通部、而して今は大學部を說くべき順序である。手つとり早く申せば、大學部は理財科萬能也と云ふ外なし。

元來慶應の大學部には理財、政治、法律、文學の四分科あれども、理財本科六百人なるに對して、政治科四十一人。法科四十三人。文科の如きはタッタ五人に過ぎぬから、其の無勢力なるは申す迄もない。世人三田大學と云へばキット理財科に連想するが、政、法、文科ときては殆んど其の存在を認めて居らぬ。理財科は他の私立大學では商科と稱するものである。第一人數が澤山居るから中には傑出したエライ男もゐる。其のエライ男が立身出世して後進を引つぱり上げるから、こゝに三田派なる閥が出來たのだ。三田派の得意な方面は實業界である。赤門出身のホヤ〳〵、法學士や、一橋を飛び出したばかりの新商學士連は、官學で候の何のと威張つた所で、三田ッ兒におつゝかぬと云ふ有樣、これと云ふのも本尊の福澤獨立自尊居士が、武士根性を捨てゝ金もうけをせよと敎へたお蔭である。三田に於ける理財科は唯一の權威、兼、財源だ。

吾人は理財科に俊秀出でたるを認めざるを得ないがまた、何故に他の科より立派な人物が出ぬかを怪しむ。神田邊には澤山のボロ大學がある。學生もボロ袴をハキ、醜き事限りなし。シカモ毎年の文官高等試驗や、判檢事、辯護士試驗にドシ〳〵及第して行くではなきか。又た早稻田の文科の如き三田と同じく私立でありながら、かつて透谷、梁川、抱月、筑水、天溪、朝河エール大學教授等を出し、其他尚ほ近來チヨク〳〵其名を聞く數多の秀才共を出してゐるは如何。云ふ勿れ三田は人數少しと。ソレならば一人以て彼らの十人百人に當る覺悟で奮鬪すべき也。少數にて叫むはロスキーか、ヤンキーのする事。苟しくも籍を三田に置き、自尊の旗風を呼吸する健男子、泣言を云はずに神田や早稻田を後足で蹴り飛ばして、英、獨、佛等の大學の敎授連を驚倒さす氣でキバルベし。喝！

△商略の成功▽

三田札の辻町で電車を降り、同朋町の方へ進めば慶應義塾の門前に出る。遠慮せずにズン〳〵入れば門の右の側に請願巡査の派出所あり。榮養不充分なる査公しきりに煙草盆を叩いて無聊に苦める樣子。あれも人の子、年が年中こんな日蔭にゐればたまるまいと同情しつゝ、幾十かの石段を登る。舊島原藩の屋敷であつたゞけに高燥の地にあるは感心ぢや、南を望めば、右に東京煙草專賣局第二工場、左に東京瓦斯會社の大タンクを見越して汪洋たる品海は展き、名にしおふ七砲臺、春は若草綠に、秋は枯草黃なるを見る。快晴の日には眞帆片帆ノ〳〵として浮び、潮風颯々と吹き來る。月夜には、海の半面、白金の柱を橫へ、七ッの砲臺は黑き一の字に見へるなど、四季晝夜、晴曇の變化きはまりなし。聞けば福翁が例の外交的妙手腕を振るつて地坪一萬三千餘、建坪六百餘

を合して一千一百何十圓と云ふ目くされ金で買ひしめたものぢやゲナ。猫の額みたいな地に縮ンまつてる某々大學が垂涎、羨望、おくあたはざるも道理至極と存ずるテ。上つた取り口に寄宿舍あり。大學生一百、普通部生二百五十を收容す。一室四人、一人は必ず大學生で室長を兼ぬる由。外觀は古ぼけたれど內容は整頓して、階下が自修室、二階が寢室と定り、冬はスチーム、バイプを通して火鉢の代用をさすなどハイカラだ。各室は高机、椅子組織で、板壁には、風景繪端書やら、美人畫やら、野球應援旗やら、コテ〳〵とピンで止めてある。寢室は一名萬年床と稱へて、年が年中蒲團の引つぱなしで、不潔此上なし。舍監はおとなしい獨身の先生が三人鎭座ます。或る一派の惡口屋は『飯食ふ案山子』だの、『舍監とは毎夜提灯を持つて廊下を通るものなり』など、怪定義を與へてゐる由。シカシ、かりそめにも長上の事を云爲すると、罰があたるよ。

食堂は廣い、獨立自尊の四大文字が額になつてゐる。飯を食ひながら自尊の氣燄をハケと云ふのだらう。食費六圓舍生の中より委員を選手して賄方を使用する自炊制度だ。一寸三日間の御馳走目錄を紹介すれば、

朝（ミソ汁）　晝　夜

日　◉豆腐　◉精進揚おろし澤山　◉輪切り大根澤山
月　◉里芋　◉ボオクサラダ　◉野菜煮
火　◉さつま芋　◉豆腐あんかけ　◉燒魚

と云ふ風だ。何に澤山と云ふは塾發明の慣用語で、商略の一種ぢや、此のコツを忘れずんば、商人として客足を引く事確に受合要するに聞いて御馳走、味つて不御馳走とは適評だ。

寄宿舍附屬の事業に有名なる消費組合あり。起原は去る明治三十六年の事で、舍生有志、時勢に鑑みて本組合を開設し、一圓株を二百五十株募集してオッ始

めた。一體日用品など云ふものは所謂『數でこなす』方なのだから、チットやソット安く賣つたつて大した儲けでもない。株は最初五十錢の拂込で、第二回にも同額出さねばならんかつたが、配當金で差引くと云ふ盛況。今では内々贅澤品も賣るから、毎日九十圓の賣上高と註せられる。ソコデ三百數十圓で賣店を新築し、小僧の三人も置き、近々に株を原價の四倍で償還する由。流石は三田ツ兒。商略にかけてはエライ〳〵と賞めざるを得ぬ。イヤお世辭では御座らぬ。ホントウにエライさ。

△家族的學園は不賛成なり▽

寄宿舍を參觀して校内をブラつけば、大小諸種の建物は軒をならぶ。空地にはラケット振ふハイカラあり。ノックする健兒あり自轉習ふ新米者あり。大學生も、普通部生も、亦たチッポケな幼稚舍生も又時には外國敎師の子女までも、ごつちやになつて遊むでゐる。この光景を切りぬいて額ぶちに、ハメればやがて『平和』とか何と題する名畫が出來やうかとも想はれる。

是れ塾の唯一の誇りである。常に曰く家族的學園である。と。シカシ潮風生は不賛成だ。學生時代に家族的の必要は毫もなし。吾人は往々家族的寄宿舍、家族的下宿と云ふ聲を耳にすれど、フ、ンと鼻先で一笑に附してゐるのだ。學生とは讀むで字の如く『まなぶ。でし』ぢや。換言すれば大いに修養すべき書生つぽだ。ホームの絲瓜のと通を云ふべき時代にあらず。須からく多く食ひ、かつ旺んに運動して、傍らに學問を大に勉め、ノンビリと他日雄飛の基礎を養ふべし。小さい子供を可愛がつたり、大きな髭男と交る必要なんぞあるものか。若い時は二度ない。豹の如く、熊の如く、獅子の如く、虎の如くあばれまはるべし。而して同窓相練磨して國家の柱石とならん事を競爭すべし。家庭の味なぞ三十か四十になつて美しい妻君でも貰つて赤ん坊でも生れゝばスグに解る。

ソンな事を若い時から養成したり、實驗したりする必要はチット、いゝトも御座らぬ。私かに想ふに、元來慶應の學生はチトおとなしすぎやせぬか。彼等は學校で社會に適合する樣に造り上げられてゐる。故に卒業後食ひはぐれのなきかはり、平々凡々の人物多くなつて困る。それよりもつと腕白を奬勵したい。何ア に舍監先生や敎授先生チト凹むだらうが、カンマン。天をも衝かんずる覇氣を持ち玉へ。あへて忠告する。

△バンカラ運動部▽

塾の裏の方に福澤邸や鎌田塾長邸がある。是れも家庭的學園の一分子なのだ。幼稚舍は裏門に近い。こゝを去る事一丁半網町に運動場あり。早稻田の三分一くらゐよりないが、近年買ひ入れたのだから無理もない。それでも三千五百坪、神田のデモ大學ならば二三十も建つ程だ。

流石は慶早仕合のグラウンドだけあつて設備整然。野次臺もあるし。運動器具も完備してゐる。吾人はサッキ、三田ハイカラだと惡口をツイたが、このグラウンドに來てハネまはる者に限り大々的武骨漢であつて、一部の軟弱兒と選を異にする事を斷つておく。人も知る如く、慶應の運動部は都下各學校の中で一番完全してゐて、柔道、擊劍、テニス、弓術、ボート、野球、庭球、フートボール、ホッケー、グリケットなどあり。是が選手たる人は智勇共に兼備の士。滿都學生界の大立物、代表的人物である。

然れども諸君は此の外に尙ほ彌次團なる蠻骨組合あるを忘れ給ふな。すでに前述せる如く慶應は大學から幼稚舍迄を加ふるも尙ほ三千に足らぬ人員であり乍ら何部に於てもよく他校と對峙し特に野球に於ては八千の學徒を有する早稻田と互角の勢ひなるは何に因るやと尋ねるに、選手の熱心なる外に國民軍たる學生隊の後援強きが爲めであらう。

彌次の起原は早稻田に遲るゝ僅に一年。即ち、三十九年度慶早仕合であつた。

『起てや起て、我校の健男兒。ペンを捨てよ、ノートを捨てよ、來つて應援の旗を握れ!!!』と云ふ樣な挑發的揭示は仕合前になると校內到る所に貼り出され、滿校の生徒潮の湧くが如く押しかけた時を發端とする。

策士鷲澤是が主事であつたが、今や鷲澤卒業してあらず。代るべき人は普通部の谷井と云ふ快男子なる由。彼れ谷井神戸郵船會社支店長の息、丁年なるやならず、すでに小常陸ソコのけの體格、學力もあるから好個の野次團長が出來る事でせう。

光榮ある三田の歷史をして、長へに持續せしむるは、よく運動し、よく勉强する學生の雙肩にかゝつてゐる。近頃聞く處によれば、學生中の硬骨漢は、秘密結社を作り、柔弱學生に、鐵拳制裁を加へつゝありとの事、大いに贊成だとうか、自愛してやつてほしいものだ。

神田五大法律學校

玉石混合の學校屋町——先づ私學校の短所を申さんか——卑怯、無氣力、ポン引的——廣告のイカサマ手段——明治大學は七轉び八起き——猫の屁の法律的解釋——商略なき中央大學——日本大學は戶水の學校也——法政大學下宿舍——知事樣も生徒——溫厚なる專修氣質——これも北雷博士の感化——何んと云つても五大學の前途遠し

總論

△學校屋多き神田區▽

神田區と云へば、天下に鳴り響いた學生區で、官立大小男女のものを合すると、其數七十有五校に餘るさうである。立派なのや不立派なのや、營利主義なのや、我利々々主義なのや、雜然として甍を競ふて、イラッシャイ〳〵と呼び

かけぬばかり、却々旺んなものだ。其中で最も信用あるが、高商、外語の兩官立、次には所謂五大法律學校に指を屈せずばなるまい。

尤も五大學校とは云ふものゝ、吾輩の月旦せんとするは、明治、中央、日本、專修、法政の諸校で、法政は麹町區だがマア、我慢を願つて神田區に仲間入りさしてもらふ事とする。本論に入るに先つて數字の行列。どうか眼を通して下さい。

△五大學勢力比較表▽

學校	總坪數	日本學生實數	清國學生實數	收容學生極限數	設立年月
明治	六八一、六一	三三一五人	一九五人	三〇〇〇人	明治十四年一月
中央	八〇三、七六	一三一九	一	三三〇〇	同　十八年七月
日本一	四七四、三二	一一七五五	八六	二二〇〇	同　廿三年九月
法政	八四〇、(?)	八九六	一四五三	三三〇〇	同　廿二年五月
專修	五五九、九七	五四五	—	三一八〇	同　十三年九月

一見無味の文字であるが、わざ〳〵文部省に紹介して取調てもらつたものだ。御存じの通り、元來一學校の面積學生數は、大きな學校でなければ、公表するを好まぬから、知る者が少ないのである。收容學生の極限は、右の表の通りであるが、實數でなくて、たゞ教室數坪數を一坪六人の法定數に乘じた積に過ぎないのである。

△私立大學生の無氣力▽

サア次には各校評論だが、最一ッ申し上げて置かねばならぬことは、所謂私立大學の現狀は、決して多大の尊敬を、拂はれて居らぬと言ふ一事である。勿論これ、極端な官尊民卑の餘風であつて、早晩打破せらるべき——否な、是非共打破すべき惡弊である。シカシ、他より尊敬を要求するには、相當の品格が無ければなるまい。試みに見られよ、英國私立大學、牛津、劍橋あり。米

國私立大學に、ヱール、ハーバード、コロムビヤ等の諸大學があるではないか、其勢ひたるや隆々たるもので、官立（實は州立）大學の及ぶ所にあらず。私立大學生は『吾は私立の大學生なり』と威張るさうだ。吾輩はまさかにかくあるべき事は當然と信じてゐるが、サテ、滔々たる我國の私立大學を顧れば、ガッカリせざるを得ぬ。

先づ第一に攻撃すべきは、私學生の卑怯、無氣力なる點である。

彼等の制帽、制服は帝國大學の夫れと殆んど——イヤ全く同じである。異るのはたゞ帽章ばかりだ。そこで、是を發見されてはたまらぬと、締革で隱してゐるものもあれば、墨で大學の文字の外は塗りつぶしてるのもある。ドウかして官立大學生と見せんとヒロつく醜態は寧ろ憐むべき程だ。諸君は動物學で擬態なることを習はれたであらう。弱小動物が、强壯動物と同じ様な外形で、他の眼をゴマかすを意味す。帽章を掩ふてコソつくデモ大學生も擬態の一種である

まいか。潮風生は來往に彼等を散見する毎に、これ人間にあらず、擬態を以て有名なる『蜂だまし』『虎斑かみきり』の如き蟲けらに等しき輩と思つてゐる。

とは云ふものゝ、こは學生の罪でなくて、學校當局者の罪である。當局者は口に私學の重んずべきを稱へながら、腹の中では、如何にせば、尤もよく帝國大學に似るべきか。とのみ考へつゝありの。彼等の理想は、外觀だけでも帝大の樣なものを作らうと云ふにある。

ソコデ、規則書には講師の名の上に『帝國大學教授』とか、『高等商業學校教授』とか、イラヌ事を書き添へ、地方の無經驗の年少子弟を釣りつゝあるのだ。されど況んぞ知らむ。この教授連は、たゞ内職に教鞭を執るのだから、六ケ敷い授業を避けて帝大よりも、ズットやさしい、簡單な講義案を造つて居らうとは!!　夫んな事は少しも御存知なく、空威張に、威張る學生は餘程間ぬけであるまいか。

更に學校の不見識なのは、四五年乃至十年も以前に何かの縁故で一寸教鞭を取つた學者、名士を、現在尚ほ教授なりとして、規則書に列記せると、校友なる名稱のもとに、夫れ等の人々を、該校出身者と混じて登録し、門外漢が一見すれば『エライ人が出てゐるなあ、乃公の倅もこゝへ入校さして……』なんかと、ウナリ出す様にペテンがしてある事だ。

一體、世の中にペテオロジーの最も發達せるは、イカサマ私立大學程甚だしいのはない。新學年の始めに各新聞に現はるゝ、廣告の下劣さ加減と云つたら唯一無二であらう。

廣告！　もとより悪いとは申さぬ。けれども『本校生たるものは、徴兵猶豫の特典を有す』とか『本校卒業者には○○大學○學士の稱號を認許す』とか『茶代廃止、清潔安直、丁寧親切』とあると何等の撰ぶ所ありや。かくて終に心ある士をして『是だから私立は嫌ひ――』との嘆聲を發せしめるので、私學のやゝもすれば、發展し兼ぬるは此の爲めだ。

△秀才の引張り凧▽

新聞廣告で思ひ出したが、例年、判檢事、辯護士試驗に及第した者の名を、新聞に總體、四號活字で大廣告をやるはいかゞかとおもふ。表面は該校出身者に、登龍門の學友を報道すると云ふが、裏面の事實は、吾が校はエラシ。この様な秀才を出したりと吹聽せん爲めなるは勿論のことである。否な、時には眞正の出身者で無い人迄、麗々と廣告してゐる――

最新の一例を擧ぐれば、去年判檢事試驗上席及第者であつた。○田○○郎なる男は、○○大學が、本校出身者なりと威張つて居るもの丶其實、關西大學の特待卒業生で、上京して受驗迄の二ケ月を無駄に費すも愚な話と、即ち○○大學研究科に籍を置いたが、兩三度より登校せなんだとさうな。然るに、一朝風雲

に乘ずれば、忽ち老猾なる學校の武器に使はれて仕舞つた！　萬事以て察すべしである。

要するに、右樣の事實は、私立大學にあり勝ちの事である。當局者は辯明して曰く『かうせねば、學校の維持が出來ぬ』と。果して然るか。果して然るか。あしさうならば、社會に私立學校ほど呪ふべきものはあるまい。彼等は教育の美名をかぶつて、商人だも及ばざる奸惡なる駈け引きをやつてゐるのだ。教育とはシカク下品に、醜劣なるものであるまい。苟しくも志をこゝに置き、育英に從事するものは、飽く迄、堂々とやつて欲いものである！

あへて吾が五大學に、こんな事はあるまいと信ずるが、他に澤山例があるから老婆心迄に一言申し添へた次第である。

明治大學

△七轉び八起きの學校▽

『エ、金杉病院前。お降りの方は御座いませんか。チン〳〵！』

ニコライ塔上、金色の十字架、白日に輝くを左の窓外に眺めて、外濠電車を東明館へ乘り切る迄に、車掌はキツト寢ぼけ聲でかう云ふであらう。金杉病院の裏にこそ、かの明治大學——舊稱は明治法律學校、——があるのだ。

木造の三階造りだが其實、あまり振つても居らぬ。シカシ其の經歷に到つては、中々振つたものであつて、どうしてもスマイルス自助傳中のものである。

明治十四年、貧乏所帶を以て起つたさへあるに、政府の間諜に疑はれ、あらゆる虐待を蒙むり、積り重なる七難八苦を、斬り拔け斬り拔けて歩武を進める。其の時に、東京法學校と云ふ強敵の現はるゝあり。競爭に亞ぐに競爭、忍び得べからざるを忍むで、互に月謝を減じ、講師を增聘し、やう〳〵にして勝つた。

こゝに於てか、更に〳〵飛躍をなさんと、大校舎新築を企て、高利貸のお金で、駿河臺に大に建築せんとしたが、材木の代價を拂はぬよりして、一頓挫を來たし、烏が巢をくふ始末。夫れでも屈せず撓まず、奮戰力闘、兎に角今は分校まで設けるに到つた校長以下の勇氣、忍耐、確かに賞すべし。一體どんな經營でおつたのか？

△山師的計畫▽

手つとり早く言へば、明治大學は山師である。

昔からのヤリ口を見るに、どうにかなろぞい的に背水の陣を張つた。其のヤマの的中のお蔭に外ならぬのだ。

無暗と背水の陣を張り、示威的、廣告的手段を採るは早稻田大學である。新聞政略を採れるも早稻田大學である。シカシ、其の運用法の巧みなる、始むと痕跡を遺さざるに反し、明大は是に倣つてや、及ばざる觀がある。

早大が、報知、毎日兩紙を御準用とせるを眞似たいが、金が無い所から、無茶苦茶に通信を利用して、些細な記事でも載せてもらはうとしてゐる。現に東京各新聞の記者は『天下恐らく明大の樣に、ツマラヌ事迄新聞社に報じ來るはなからう』とツブやいで居る。

早大の文科、商科の旺んなるを見て、早速眞似たのが明大である。シカモ、文科の如きは、着々として近々閉鎖せんとする由。其他運動部をも眞似たが、あまり効果もなかつた。

袋町、小松宮舊御別邸の隣なる同運動場の如きは常に草に領せられ、子供の遊び場所となれる外、時々明大のテニス連が、猿股一つの素ッ裸に角帽と云ふ珍妙姿で、ラケットを振つてお出で遊ばす位、先づ有名無實に近い。運動會もあれど要するに集つて食つて駈けくらする位が關の山。明大の特徴はコンな事

よりも、

△法律研究の熱心▽

なる事にあらはれてゐる。創立以來すでに二十餘星霜、其間に產出したる法官は大變な數だ。所謂明法學士は各裁判所の判檢事より、地方の村長に到る迄に分布されてゐて、法曹界の一大勢力となれり。男三郎事件、騷擾事件で流行ツ兒となりし今村恭太郎氏の如き、矢張本校出身である。

明治大學裏に寄宿舍あり。キタナキこと天下一品。門は下宿屋と下宿屋との露路で、傘をさしては步けぬほどの路幅、取附きが玄關兼食堂で、次が應接室と云ふ具合な奇妙な配置、更に各室に至つては二十世紀にもこんな部屋があらうかと思はれる位。天井黑くして低く迫り、古疊凸凹して踏めば蛙でも潰した樣な音がするに相違ない。夕立降れば、天井洩り、月夜には戶の隙から光がさすボロ普請。學生は此の亂雜な中にあつて、權利義務研究をしてゐるので、たまたま俳句を作つても

『猫の屁は壁の外から意志表示』

なんかと云ふ。如何なる新派俳人も思ひも及ばぬことをウナツて、孜々勉學しつゝある。シカシ、近頃は大分ハイカラも殖えてきた樣だ。スルト、覿面に卒業生の成績が以前に比して劣つてきた。あぶない哉、あぶない哉、學生ハイカつてろくな事なし。矢張田舍武士的の素朴なに限る。岸本校長お氣はつかれぬか。チトしつかりやられてはドンなものじや。

中央大學

△君子風の學校▽

神田錦町二丁目は神田警察署の隣、アノ邊には珍らしき赤練瓦の建物がならん

神田五大法律學校

むでゐる。安倉庫然たりなど、皮肉を申す奴があるも、羨ましさの惡口に違ひなし。一寸見ると警察署の練瓦塀迄此の建物の中かと見へて、壯麗（？）よく〳〵田舍漢の魂を拔き得べし。これなむ。法學界一方の重鎭中央大學の校舍である。

明大が相場師なら、中央は君子に比すべし。其のお人よしの點に於て、又た正直なる點に於て——

概して言へば、私立學校の經營は、商人の頭腦と手腕を要するもの、從つて校名の如きは、屋號と同樣、あまり取り換へぬがよい。然るに本校は初め英吉利法律學校と云ひ、轉じて東京法學院となり、三轉法學院大學、四度目には中央大學と改めた。其の變りやすき事、猫の眼玉の如く、秋の日和の如く、男心の如く、紫陽花の花の如く、どこやらの施政法針の如し。是を慶應義塾の半世紀を一貫して、名を更へざると較ぶれば如何。シカモ猶ほ耳にせし處によれば、法學院大學を東京大學と改稱せんとしたれども、文部省が東京帝國大學とまぎらはしとて許さなんだ爲め、中央大學なんか云ふ漠然たる名にしたとやら。其の商責（？）にうとき、腕のなき、私立稀に見る學校である。

それかあらぬか、奮發次第では明治など後足に蹴飛ばして、神田諸大學中の覇を稱ふるは頗る易々たる事でありながら、相も變らず提灯の化物の樣にブラブラしてるは惜しい事で、吾人は働きのない亭主を持つた女房同樣、氣がモメてならぬ次第だ。尤も、明治、中央の二校は決して仲は良くなくて、私立專門學校會議などでは、明治が共同して月謝を上げ樣じやないかと提議すれば、他方はイヤと反對し、中央が講議錄をタヾで學生に配付せうではないかと發案すれで、一方は馬鹿云ひなさんなとケナしてかゝるなど、頗る珍妙な鞘當てがあるさうぢや。

中央には法律、經濟の二科があるばかりだ。講師は大抵他校からの借り物。獨專せるは花井卓藏氏だけだ。

神田五大法律學校

花井氏は中央出身の最も成功せる人である。天才の俤があつて、僅か十九歳にして法學誌林記者となり縦横の論、法曹界を騒がしたもの。辯護士としては他に卜部喜太郎氏などもこゝの産物。明大が法官に發展すれば、中央は辯護士に伸ぶ。面白い哉この二校。どこ〳〵迄も敵？　である。いづれ死むだら地獄でもイガみ合ふ事で御座らう。其他新聞記者には大英遊記と七花八裂とで賣り出した東京朝日の杉村楚人冠氏。二六の秋田清氏、萬朝報の河上清氏その他數名を産出してる。

更に轉じて、學生の氣質を云へば神田中で良い部に屬す。大抵品行方正にして、「モテタ」「フラレタ」などゝ、長距離電話の番號みた様な事をシャベクつて遊むでる奴はマアない。クラス會、茶話會などにも喜こんで出席し、學友の仲頗る親密なり。——特に、試驗に此の課目を省いてもらほうなどと云ふ折は、同級誰一人異議なくして通過する位團結力が強い！

頃者路巷に風説あり『早稲田大學の法科振はざるにより、中央大學を併せて、其の法科とす云々』と、成程、もと、中央の創立者は、早稲田から出たのだら、事實かも知れぬ（早稲田の幹事、田中唯一郎氏は極力此の説を否定しつゝある由なるも、どうやらわからない）もし事實ならば、面白い結果が生じるだらうと思う。何にしろ中央は君子の風のある學校である。

日本大學

△精力主義の戸水博士▽

幾百千の男女、眞黒になつて稼げる砲兵工廠の煤煙なびく、神田三崎町一番地——名も堂々たる日本大學は、その一隅にチヨツピリと置かれたるペンキ塗の建造物である。

校長は胡麻鹽頭の松田農相——シカン云ふべき程の事もない。否な、云ふべ

き事實を知らないのだ。

理事はエビスビールの商標然たる戸水博士と、皮肉屋の中村博士。けれども日本大學の實權、及改良は主として戸水博士のアタマより出るのだから。先づ氏の經歷から述やう。

バイカル博士事、戸水寛人は、文久元年六月、加賀金澤に生る。小さい時より漢學を勉めて諸俊傑の目ざましい事蹟に幼ない血を湧かした。特に外史を飜いて、毛利が嚴島參詣の件『汝等何をか祈れるや』の項に到り、志は大にすべしと、獨り案を打つて叫むだ。而して又た興世王の『一州を奪つても誅せらる』の一句に多大の感興を得た。すでに享けがたき生を此の世に享く。謀反は困るが、苟しくもわが三寸の息、存ずる間は、向上の一念懈るべからずと、細い腕を扼して自ら誓つたのであつた。三つ兒の魂、百までとやら、此の志は、小學の彼れ、中學の彼れ、大學の彼れ、洋行中の彼れ、教授としての彼れ、又た近くは代議士候補者として運動せし時の彼れ——と、時と所は異なるも、一貫して、常に向上の一路をたどる外はないのだ。又た旺んではないか。

氏は徹頭徹尾奮闘主義、精力主義の人である。潮風生かつて、其私宅を訪問した事があつたが、人間意志さへ強からば、チット弱い者でも強くなれる。吾輩などは昔は弱かつたがと大氣焔。法螺くらべには、霸氣と野心があり過ぎ、治國平天下の政治家たるべく、なまじつか學問があり過ぎる氏の如きは、一寸適所を得るに困難なものである、、、、、が、天の配劑は、不思議にも、氏に持つてこの位置を與へた、夫れは。現職日本大學の理事なのだ。戸水氏は遣り手である。かつて大學組織にした砌、日本大學と改めたしと願ひ出た所、融通の利かぬ當局者は、國立大學の樣な名なりとて許さぬ。中央大學式に引き込むかと思ひきや、流石は戸水博士。いつにな

くニガリ切つて、『すでに私立に日本中學あり。而して日本大學不可とは是いかに？』とやつゝけて、美ん事初一念を貫いた如き、氏の面目流露するを覺える。市井の駄酒れッ兒曰く『戸水博士此のお手際カンジン々々々』と！

△改良か改惡か▽

人間到る處貧乏學校も數あれど、日本大學は其の錚々（コンナ錚々は感心が出來ぬテ）たるものである。かの校の事務員某は常に辯じて『大學は病氣の治療に入る所でもなく、建物の見物に來る場所でもないから、たゞ智德の修養が主眼です』と云へど、要するに是は第三者の云ひ草で。當局者の申し開としてはチト苦しい樣な。

戸水氏は此貧乏大學經營の難關にあたつて、心血を注ぎつゝあるのである。其關係の深き事は日本大學＝＝なる方程式が立つ程だ。

戸水氏は一昨年一大改革をなし、すべての學年の別を廢し、卒業期を年三回とし、他に殖民科（實は商科に殆んど同じ）を創設した。理想から云へば、このヤリ方は時運に適當したものだらうが、實績に至つては怪しいもの。改良に非ず。改惡なりと呟く聲を耳にせぬでもない。が、この邊が戸水式の價値の存する點で、專門學校中最も年若きにかゝはらず、今日の名あるに到つた原因かも知れぬ。

終に本校の特徴を列擧すれば、（一）夜學なるが故に、社會各種の階級の人が集る事。（二）生徒は年を食つた者多きを以て眞面目なる事。（三）師範部に限り精選に精選を加ふるよりして成績、同等各專門學校に冠たる事。（四）近來各種試驗に登第者多くなりし事等である。

法政大學

神田五大法律學校

△苦學生の學校▽

法政大學は舊稱和佛法律學校、明治二十二年の設立で、麹町區富見士町にある——と云はゝ、立派らしいが、實際は『不』の字が上へ冠になる學校。面積も三百坪内外で、あれでも大學かアねと、田舍物さへブッ魂消げる位なものである。これではならじと思つたものと見へ昨年、ヒド工面をして富士見教會の隣へ分校と寄宿舍を建て、やう〳〵活動せんとして來た。總理は有名なる梅博士。教頭は富井博士、主幹に秋山博士あり。却々のお手揃ひ、校運隆々としてアガリさうなものであるが、さうも行かぬらしい。兎角、まゝにならぬが浮世とやら。さて〳〵困つたものは候。だ。

本校の特色も夜間教授だ。

夕ぐれ、アチコチの街燈ほのめき初める頃、校門に立つてゐて御覽、來るは來るは、社會百面相の好モデール半白の老人もある。人生の健鬪に倦きたと云ふ樣な三十男もある。紅顏の美少年が苦學生らしき、蒼白い青年と語りつゝ來るもある。要するに木ツ葉官吏、三文腰辨が、向上の一念いまだ絶つあたはずして、苦しい生計から授業料を出して、安息時間たる夜を利用して、少しでも學問を身につけやうとせるもの。誰が其の姿の振はざるを笑ふ者ぞ！

吾人は學校及學生の健康を祈るものである。

△下宿舍瞥見錄▽

法政大學は日本人より支那人の學生が多い。されば、寄宿舍も支那人ばかり收容せんと、貧窮な財政から一萬圓を支出して分校の裏に造つたのであつた。昨年の四月の盛大な開舍式を擧げ、サテ入舍を許すと云ふ段になつた所、不思議にも一人の申込者もない、舍長や會計方や、受附や、賄方、小使などの役員

がゴロついてるばかりで、今日は明日はと待てど暮せど猫ッ子一匹やつてこぬ面食つて學生を集めて入舍を勸告すれど豚の耳に念佛。其内に蜘蛛は巢を張つて戸を封じ、鼠は晝猶ほ荒れまはつて賄の原料を引き出すと云ふ騷ぎ。今更叩き潰せば損だしと、委員を選むで原因を調査した處、一室に二人以上置かせらるのがイヤと云ふが第一因。下女がゐぬからぺケだと云ふが第二因。舍監風情にケチ〳〵小言を云はれては腹の蟲が收まらぬと云ふが第三因であつた。シカシ、寄宿舍たる以上は彼等の注文通りに出來ぬ。そこで止むを得ず門表をハズし、下宿の如くし、各室一人、賄料八圓、下女を置き、監督の程度を寬大にし、やつと、定員だけ入れて、ホッと一息ついた。シカシ、モウこうなれば、寄宿の稱號は與へられぬので、門表は撤去され、目今は屋號のなき下宿屋——即ち假りに下宿舍と命名した理由である。

いま、各留學生の部屋を視察するに、裝飾はソックリ支那式で、壁に紅唐紙

に漢詩を書いたのを張り、持物萬端支那製だ。學生も辮髪を蓄へたるが多し。中に異彩を放てるが、某知縣閣下と號する六十男、鶴髪漢なるも氣力は壯者を凌ぐ。從者をつれて速成科に學ぶと、邦人やゝもすれは支那を輕侮するが、日本の知事諸君、この元氣ありや否や、頗る疑はしいテ。

要するに法政大學は支那人多き大學である。

專修學校

△北雷博士の勤儉論▽

回顧すれば早や數年になる。著者いまだ某甕にありし日、新學期に田尻博士の『財政々策』の講座設けられると聞き、樂しみにして出かけた事があつた。就業のベルが鳴り、生徒席に着いた頃、痩こけた、カチ色のツメ襟の夏服きた

風采旺らぬ紳士が、飄々然と入り來り、教授席に腰をおろした。オヤ！と獨り言して隣席に問へば、これぞ有名な男爵田尻博士との答、開いた口が暫らく閉がらなかつた。

日本有數のエライ人。大經濟學者。財政と金融の著者――とのみ思ひつめてゐたので、さぞかし英姿颯爽たる紳士スタイルと想像してゐた目算、ガラリと外れて大失望した。

然れども一時間の課業終つて後は、失望は滿足に早代りをしてゐた。まことに博士は質素けによらぬ立派な人である。堂々の論陳、該博の所說、なまじ、かのコスメチック博士以上であると知つた。

否、更に、其後某學士より、博士の氣質を聞くに及びては、滿足に加へるに畏敬の念を以てした――それはかうである。

世を擧つてハイカラに憂き身を窶すの時、北雷博士獨り、揚らぬ風采をして平氣だ。博士はつねに曰く、

『人、たれか素樸を好む者あらう。シカシ余の如き貧乏人は（勿論謙遜の辭なり）どうしてもそれを我慢せねばならぬ。又た想像すれば、天下にも同樣の人が多からう！

身分不相應の生活は斷然排斥すべきもの。人間は必ず、自己の收入以內の生計をすべきである。而して、もし正當の收入だけでやつて行かうと思へば、勢ひ素質たらざるを得ない。支出は往々にして豫定より增加しやすきもの。財布の口は餘程締めねばならぬ。

第一吾々には父母妻子親戚なるものがある。これらの病氣の費用、敎育の費用、冠婚葬祭の費用……と計上して行けば、なまやさしい金では到底駄目！

こゝに於て貯金の必要あり。貯金せんとせば派出は六ケ敷い。兩立させやうと思へば、背に腹は代へられぬから賄賂も收らねばならず、心なき業にも從は